大野定子詠草大小十二冊の内

2

十五

不二園

洋学文庫
文庫8
A 180
15

文化十四年一月 上の御会始に
竹有佳色といふ御題にて
松こそよろつ深かるこれ竹も
君の八千代にかはらぬ色と千春
これ竹の千代のみちをそへて
ともねの庭に生茂り行 梨
松契遐年 従来ニ云
かやうの松にかはらぬたる心地して
さすかにあらぬ世を見て計 梨
なりける千年ならし君まちて
若宮の松は白きを見たる

昭和26年12月10日寄贈
大槻茂雄

海上雪　小古

浜の名にたてる神のをしへて
しほ風もあふれ出しまゝ
雲はれて夕汐の釣舟に
下ゆきかふ人こそしらね

鶴立洲　藤久子

日影さへ中洲にたてる芦田鶴の
あはれなきさに千とせ契る
おなじ鶴も洲先の青みにて
何ころ寄てあまる家ら舞

寄松

君より松の友ぞ生まれし
よろづよもたのむ宿の松のたか
末頼もしき千代へしおとおほさん
まつからなき声の声こそ
　よろこびの新年の
　ここのちぎり
とこしへの年ふりしこころの
松みちとせしきこえ
若竹の大路よりよろこびの
これも世のおしまれや

おなしく　風雅新年たい

新年のをりしきみをわすらしき、
やしろ風のおもせけふや
風のちからもわすられてとしの猿の
なつく世にあまし梅のこらえさ

宿木梅　孫房云

年ふれと宿に世よね絶わかる宗木
人香そえて下葉とも絶えぬ
なつかしき心も世において
まさく薫るその梅の香

降つもる空行きせ錦の雪の
こもれ出てしもえ薫るの梅

芳草　證

春ならず霜ふかき芳生い
まだ若草もたかならして
消えても雪に消えぬ筆
まだ下草の空宿の芳草

霞添春光

春たちて立ちこえ空まちわびの
みやこえぬその春の

春秋の頃ハおもしろくいちろく
然るに秋ハ霧なり斗条

三家鶯

古年の梅枝にかく鶯なり
我宿も鶯のなく此梅

・隣家鶯

霧立つ野をわたる梅の香る
小家の梅よりひきの音く
出ぬし野辺の梅も去年く
去年も宿の鶯鳴きぬ

子春秋

春もまた新風吹きさとに河り
はちりつ玉子もおなし分り

一月十九日にふりしきる雪降ぬ
読見の夢のことく傷心なやむ

茶摘もたのしう北条

天津日嗣のみさかえ申す今
は萬国とまじはりて御国を
きたる事多し されどもちひ
られるもさしなき学の道は
これまでに於るの外は殊にた
ちよりは世の中の学の業も
も又いと出で来つる都を
なるゝ事多くなりぬれば女子
等もいかなる事をも学びて
給はんとなす事こそよろしけれ

つましうも君主たまくら
ゆゝしき方にも知らせ給ふむ
こうしたるとやうも思ひて給
つかまつる事の為とかいひや
日本のみにあらず諸外
学問の業を給ひしより女子も
わかりて世の事をも知り給ひ
なり候も学の道に勤め候へ
せむこともとのつとめにかふ
きゝ申すべし

人なみに茶に入られて一味の
ぬかりもおかしく存候

手紙
わたしとも小雨にまかりこしの
御教ありかたく御禮申上候
書下家
こゝの御手かゝみの一こと家元子
随分愛さへ深しうる乞楽
松かさの御手を拝候我らの
いつまてもうれしうれしかる
御代もかねかねの書物と
かくれもなくにさて家の内

沢辺蛍

蛍とふ沢辺の草の隠れにも
涼しかりけりたちよらましを

蓮中扇

なかなかの心許しは夜の雲
扇ならしつゝ涼しかりけり

竹間扇

竹の声をきく世をみて扇ならし
吹つくる風を竹の音

千秋扇

手に入る宮の扇残し置く
さてたかく行く年をへて

夕納涼

風渡る池の石橋ふみならし
涼むも夕べは夜なかりけり

夕月のさし入る影の涼しきに
ゆふされは涼しかりけり

我心の宿りこそ夕されば
夜の涼しさ風にまかせて

おもふことなき月の影

きしねゆきねは夕へこそあれ
涼しさの河らあれとも流るめて
こゑの夕風そ涼しかりける

秋の歌

萩風　三條西實の一足ん の子

なにとなく秋は野の萩か下風も
世のうきに衣なるころかな
枝ことに露おきかけて袂さと
袖かへす露なる萩の上風
風さへ野きの萩の下露に
ゆふね袖さへおもくなりけり
玉露は拂へと風の萩ちるや
野分くる人をおもはまし
衣そと萩原風のさむけくを
うつりてもかはらぬ秋を待るべき

山路薄

ほのかにはやる露に白くなる
薄の末をしるべとつ野の山
雲わけて旅の末の路をなかば
薄の末そよく袖を摘けり

つらね体をもて詠みて
若みどり葉をもとめて行く
冬梅
ちらちらと梅さく河芽生の
おとろへぬ宿とも見えん
蝶の来て生まれたる
露霜に末葉かれゆく梅さくも
うきは何なると何とも見ん
情あるむかひのをたてよまさ
末葉にはやせて見る梅の花

明治十五年
三月春雨
風さそふ柳の糸の乱れ
露おもみなびく春さむけき
江霞
櫻の花かすむとこし江ず
柳引く霞のの霞の朝
むらむらと霞むくもの江の
まさ見えて来るさゞなみ
みさごの江の霞ふかみ夜に来て

みなとなる江に霧の秋の
津の国の難波の芦もみえぬ哉
夕霧は霧にこもりつゝ

梅薫枕

立寄し袖にかゝる梅か香を
やみの枕にうつりぬる哉
袖の香のうせしも枕にうつりねの
枕あたりに薫る梅の花
木のもとを夜嵐にちらしては春
枕も梅のにほふ春の夜
夢ねるたのみもたえのまよひて
枕にうつる梅の枝の香

朧春月

花の色は霞にかすむあらし山
朧月夜霞みしらるゝ
朧夜の月は木の間を霞みて
もよりあへる春夜のそら

春宵

春きてはゆたふ心はまさる哉
いとまなりしもつかるゝ春

隠家　久子 画作

いさゝる流れなる水は枚さへ
青柳の糸の玉をみたれや
いはほなすかくれしは我庵の
外山のいさゝいさよひてゆく
いつも枯なきさゝなみの夕月夜
さらにたのしき面影ぞする
夜山の青柳の夜のさゝら哉
あふ坂の色もさえなし
さ夜待千鳥　京の 画作

松かせにまよふこの杉篠の
心あるさまにならひてこの秋
すみなれし人の名残をおもふかな　近之
山松に月はさしても今も秋

林亭夜月

しづかなる園の林はふけにけり
風ふきて月もさやけし秋の夜は
光ある袖にうつりて見えわたり
林の梢ふけてかゝる夜の月
竹林のこずゑを離る月待と

さしおもちの夜のつき哉

吹風にたなひきわたる夜のまの

月にくまなき空のかけ

ふる林のはらゝの月をとりかねの

袖にやとりてさえむしろ哉

竹間夜月

夜もすから心のつきにおもふ哉

竹のはもれくるかけのこほる月

雨後夜月

夕立のはれてかゝる山かけのはる

月夜遠笛にまかる琴

夜深鐘

しらねの夏秋に聞にされ

さしもうくしき夜のゆめの秋

雨後夜月

降つゝし雨くもりて梅の花

おほえは月に虫にかゝる哉

名所旅

久かたの月の移る里に宿とても

たかきよのなかるゝに猿の秋

是非の幾ふしハ風とこそ見て
やゝとまれ秋床し月に宿らう

おもふこと山あるかたの夕たちもふりて
しらくもきえて千鳥の秋

夜月

故郷のあとはしらすもよその月かな
今宵もいくよ見しつきの秋
またしやとむかしは今やさ夜ふけの
さぶらうらにさしたる月影
故郷の秋のかげさへ影
月はくもまを照らしつゝ

寒菊

かやもおちりつゝわくらはの
さらくとよし小山田のさと

夜月

夜すがら月夕へを秋のや
つねよりもわかる霧夜の月

落雁一声

まつ人はよそにもやなかんかりがね
やどりとるその雁かね旅寝の一声

初穐風

蝉なくと涼しの雲も分てゆく
難波江の荻の葉風のめてしかな

初穐虫

まだ十日なるも秋も涼虫の音
きのふける穐ハ来にけり

暁露

蝉秋暁の草葉のうへと置く露
袖の色もなれ袖に露ぞ

穐夕

秋夜虫

鈴虫はなくらす物はかなきや
これのうきをよそに虫の鳴

秋夕

なかめする秋は夜もおもひつゝ
鈴虫の夕へハかのこゑそあはれき

荻風

そよくと荻の風はさはくなり
そのよの花も葉も露ぞ

故郷荻　鈴木重胤

故郷に荻の帰るさを待ちて
露にも掛ひ比へる人もなし
荻の葉にそよくはかりそ故郷の
露をも床に月をまつゆふ
帰る人も涙に袖をぬらすらん
野辺たひそふさの露の

月前露

不断に秋の夜は露の
あるとかの月の影ぞ
まつ千草の露とはかくれ

二所に二ゝて月は影哉
ちの影は月は宿る竹の末哉
二所と今宵もおさへ晴しなり

月前虫

つれなくも秋てふちる月影に
あはれも深き虫の聲哉

山家秋 并存之

宗ぞ住居で荒れて山里は
あはれき秋に生ひてふる年
粟もるも紅葉ぞ増る山里の
錦をさらしと何思ふらん

山家紅葉

又さらに染し人は家山の
かくもの色はかはらじことぞや
は錦は空の錦となさぬ筆
我亦かくもち人ともならて

霧中紅葉

かくもち染ぬと霧は錦の梢哉
遠山の紅葉色もこえまし
明ゆけと本俺ぬ紅葉の

絶まなくにほる霞たちこもる
立こもる霧の中より高尾山
そはてゝ流るゝ見ゆる月かな

月前

閑落葉

今朝みれは閑寂の松に降つもる
雪の上に落葉つもりて
正宗

冬かれの野辺の松に吹くる
まかせてそ庭に集しなりけり

明治十六年一月歌会始

四海清

藻もしく積出たる四方の海

くもりなき御代の影こそ見ゆる

民たくの心も清きよ四方の海

つくる船やゝう年来らん

一月一日

おもらくにむしもてゆくて新しき

年は昨日のくれにつきたれ

かはらぬ春を迎へて藤衣ハ

やすらこえつるおほた宝なり
人のおとなふまでなつまん新しき
としぞむかふ千代のはしめの松
皆ともに契かはして天の川
おのおのたゞ来るとしかれ
わかりしきみ霞風をさまりて
千代のとしふる来るとしかれ
菊花の松子ぞそふかなかは
千代のためしを松こ年なり
緑なしと君つれなきも年々

おのがつらぬるかきつくらく

松 脱俗

ひさしくふるまふなる緑常にきる
松のまへにはなきさの声
はるかにみどりふかくしきみ
ふよく末ね君の松ね
引よせて名のみ千代たまき
松の間まつをふかきの声
あまをわかれ料ふかね宮のよ
あさとまやそのしらべきて

新年　ちよ子

あらたまるとしはいさゝか
かはりなく去年もことしもわかみ
あたらしき春のめくみゆたかなり
人の心はよろこひにして

新年雪　久子

こゝろよりまつ春きぬと
雪ふれは春をしらすて
たちかへる年は衣にして
雪の日の春のきるさと

新年鶯　清水

春きぬと今日はしるらん鶯の
やさしく鳴く声ききて
谷の戸は深き雪のうちにかくれて
声のきこえし鶯の

雪中梅　依子

いとはやく咲くものかなとつくる
雪のうちに梅の香そふる
こゝろにはあるものから梅の
雪にたへてぬれしも

枝ことにつもれる雪は華となりて
きのふの木々の梅や咲らん

新年会友

こゝろあらん千歳の友をかはらめ
やよひとも(にほ)ふ色あらん年

新しき年のはしめ(に)さ給ね
友かきの(かはら)ぬ行すゑかけし

松柱寄人

常盤なる松風さへもきみか代を
千とせふるこそ松なる年

梅

むかしそて香はかはらし梅の花
常盤なる我も(詠)みつる香

待雪

ふる雪(そ)らにかゝる(梅)か枝を
やまに(雲)の晴るゝあらは

待春

いつかは春をまつに(青)葉も
心よりにほふ(梅)の(香)

まつ(詠)の手にふ(れ)もあれて

春雨とみえし河の霞

山家梅　宗弘

知られぬ人もとひけり我宿の

かをりおくる風の便りに

山さとの神垣の梅咲ぬとこそ

訪ひくる人も春待なり

野雪　余久　服部

春よりも千里の友は此のまを

いまひとつくしかねの白雪

霧亀の裾をたつねはかへぬる

雪やうつりけむ花とみえけむ

雪降ぬる日

雪ふれは山のこなたもつもりねと

うすきにかすりてわかれなりける

野山にゆきと花と見えしは

つもりね老の心なりける

白雪のふりつもりて来ぬし人もなく

あとしるき残り行ける

さし林の橋本町のしるはなと

ゆきとふるるに花は来れ

こゝも猶陽のたかさき寿しらぬ
霞のうへに浪路の中はかすみけり

海邊霞

なにはえの海をこぎゆく舟まさへは
霞にこもる浦のまとまに
うら松が枝の袖を隠しつゝ
松のかたへは霞たつ平家
まらにと霞たちこめて雲井の海
沖のは雲をさそひて見えしは
隠ろはで霞立つゝ舟をと

おりえのひとこゝろ思ふも筆

路邊松

後のよまでと人のこゝろに植おきし
ゆくての松はたよりなりけり
緑なる松こそ旅ゆく人の
松のかげにて人のやすらふ

庭之鶯

山の井の庭に来なきし鶯は
からは庭にも来て鳴くなり
来ても猶来て咲く花の梅の枝に

うち靡きねをふかくうらやはと
篭のうちもねぬよの鶯人より先に
おとろかすね生まれたる鉢

海霞

山もとの宮河ゆくる丹舟まで
行かくれ霞たちぬらむ

下霞

春霞らしき波もまたかり
関山の梅はのかなるらん

夜梅

吉野も漏れし色の木の枝子
薫りいのそる水鉢梅の香

夕鶯

梅かえをまた春あれて夕へ
ねくらやしもる園のうちにさ
鶯ぬれてをすねるすゑ遠く
さえ行く声にうちの雨やとるらん

関霞

あふ坂のせき射も霞らしを
かよひちも霞たちたる先年

紅葉つゝし岩ハ滝なれと
聲ハ霧のあなたまさり
夕日の色染分之の名つゝて
俤うつりて二重なれ

川霧

秋霧の松杉峯に隠るゝね
ゆきゝの人もつゝみたるかり
舟ありて渡りゆくも川岸の
松の峯までつゝみたなり

霧中松

月の影のあけの松や隠るらん
霧たち山の麓の葉かくし
月影をもらしの木々の松の枝
霧のにしき木葉もうつろひし
松の色を見るたゝ見てさも雅の
春ハ霧の衣をまとひ立あかり

霧中雲

あさ風に来りしてぞやまと
春ハ霧の中にうつりて見ゆ
長谷の峯も奥まで

のどけきハ春たつそらの霞なり
深山にも春たちこゆる霞かな
人の心を引たちぬらん

海上霞

うなはらのなかにしとこゆる
春の霞ハ跡とゝめつゝかな

早梅

梅か枝も咲そめにけり冬枯の
谷のとの中にわきてそみゆらしな
うひに花咲る梅のみのなかなり

人ことに見えて葉るかもの哉

雨後春月 雨後ハ公の御席にて後月歌を物りくるのかな

春雨の名残の露りえねさして
花の枝露にも月やうつしの哉

江上霞

おくれるをまきこえ行春霞
春ろしを舟の歌しそて

山家花

山里のつゐにさきちるの花まてこそれ
木末まちえつゝ花咲そめけり

住人も絶えし山さとの
盛りやとへる花ざかり

閑居春雨

つれ/\と雨静かなる春の日は
ふるものゝ音にれなるかな
しれね人学ふ身にはいとゆかし
わかつゝみれし春雨の降る

隔山花

神さひる雲おもしろき心地して
ふもとより山の見えさうなる
これをのみながめし山のさくらを
へたつるはなる雲このかな

古竜草

ふるいにしへの床のさびしく
空しくとなりてあれ果てにけり

待子規

樫の葉雨にぬれてゆく人も
こゑまたのみなる杜の森
人なくにまたれて待ちわびし
ふかき夜ひわふる月まつらん

雨中新樹

山さとの若葉のさえて降るに
雨そそくも梢ましるの森
我宿の若葉の梢みどりにて
新きぬうすき雨のしづくの森

夏夜雨

むしのねハいとゞしげきと心地よく
おもふ夜ハさへ涼しくなる一の雨
蝶の掛けるゝ陰にも風たちて
雨あかる庭に来なる夜この雨

夏新樹

こまかなる若葉そよぐ夜の雨ハ
青柳の茂きに影の色ある

夏夜月

青すだれのはるゝ月のかけハて

月影夜にも涼しくなる一の雨

夏夜

何とはなしの夜の星
こゝろ思ひハゆるきなり
夕風も涼しき夜の木陰にて
若葉にそよぐ河のなかれたえす

社頭夜　上沙島町写千七首秋　大社东京祠宇内

吹風の涼しき神垣の
こまやかの森ほのかに月も見えて
夜ふかくも見るかゝる嵐かなて

袂のやゝたゆたふころかな

から衣袂のうへは露の玉ちれ

たちよりておもはずてつとふ夜の秋

夜衣

ぬぎすてていく夜もたゝね夜衣

身にまとふまゝにかさねける哉

樹陰納涼

こゝろせぬ袖も涼しくなる哉

なつの日のかげもらさぬ夜の夕風

たちよれば雲の木蔭ぞすゞしかりけれ

森かげはまた涼しかりけり

螢稍積衣　勝叔

うすきぬの袖のすそこの螢をば

もらしつゝなるさすがに哉

かきわけて出る螢ぞさよ衣に

露むすぶ夜を衣もはらへる

河夏虫　大平年年ノ宮ニ　菊水ナリ

河きしの波のまにまに月ひかりふる

うつりてもよ初めの秋

森... 和名の
... てりてる

おつゝき行はるゝ御煤払ひあり
まへの御殿を清めらるゝ也
移の家々拂ふとてもちひ傳
其夜しきりての煤はきの礼

中宮原 十二月十八日 細見紀行

宮を給ひの亭子煤はきの歌や
小しみのさを被中の下庵

宮中書 十二月二十 行乐紀行

宮中官女御殿は集わりて
書のさまはこれいたすなり

書にはあれにそこらの衣を給
宮殿宮々は御出ありて
あまた山書給したれはこゝろさえ
御所にていみもうさる夜の礼

年暮

宮中にも年の情ある年
此年のもの年頭名納を
らとも年のうちに祝ことをかさねて
されは青からの斗架
ありいはやきもにしくれて申

としのいそきくらへてしめくくりこう

朴霜原 けうナセス

なかれたる今朝ハあかるき霜の

つかれくるもやの霜のかれ朴

落葉 十一月 なれは玉きこと云

たかのはの落葉にちりかふてゆゑ

ちやうこ
山路の落葉の落るかへり

霜のうへ空千一ツ時雨てまこと

かくもみち落葉ころりきらくこのかれ

落葉霜にもかりん冬かれの枯野

紅葉散るる志らの葉末の風

山のはの錦のきれにもおのつから

色ゆきてなく霜年ゆくかへり

夕時雨 ハ前出

あらしふき木の葉もちらす山の端の

山白ふたるしくれ降るて

冬千鳥 十二月 部出

かねてゆくはるかなきて月夜し

志のふの浦千鳥なく峰に

ねてや経る浦の月夜かへ

わすれ草山千鳥もこゝろあり
此ころは千鳥の音まで世にたえて
萬世かねまて生るかぎりは
おもひやる浦はるかに霰ふる
なきよるの千鳥命しく

筆蒼雲

思ふことにかなふるすべしと
行こゝろよし青葉かな
我つま情におこる柳かな
此代ゆゑかゝる君か筆

雲井平板　こゝろ読之

かやうの古き言の葉袖にみちぬ
霜ふるゝの夜白ふゆの雪の朝
霜露のうちにおひて花ちる葉には
とく咲たれたまの斜かなし

名残　冬ハ

大月ハ今の傍く名残日に
ふきをとひよみる宿ハさやかに
低のかたゝ年ごとかきおろん
はかなき事にも行しのふかな

雲山月　　　弘経御しう

かゝる山霧はれかゝし月影を
さえぎる雲の峰こえのぼる
さえぎる山かけしきりそひて
下ゆく水に残る月かな

冬鶴　　　小山尚芝

霜ふかくおりしたる雲かゝり
千代よふ田鶴の声ゆかし

寄鶴祝

浜の鶴よるゝ世をへて和歌の浦
ひとつのつきいる声もあまのさ朝

寄雲祝　　　松坂菊彦

諸人のつとふ数ふりつもる
雲あふきちかふれさく兮

法宝千年　　　小尚芝

くれはれつゞるの声ある静かにて
承りし千年命のさえ

明治十七年一月一日
はつそらやこえおとゆかしき鶯の
らうたきこゑもちよにきこゆらん
おもふことおもひなしてこそかくてこそ
このつらんの心なるらねや
花水を人のこゝろにみせなから
かねはおとろね宿になるらん
このかひをかみにえてしておもひかは
ちよまてつもる千代の言の葉
人のよにかゝて今年は言の葉の

まつてふ言をきくにつけてし
一月十二 窓中年久 深水亜紀
久方の雲の上なるくらゐなる
いくとせかさねの松の雪
まつはよそにいはる松ならん
青柳のかさねの青柳かな
おもへとも心にかゝりけさはなり
うれしきこゑのかさねの春風
一月廿二 花前竹 小出亜紀
あらはしてこゝろをまちなはれて

春の日のひかりにとけてふる哉

こゝろ梅かえにうつるゝ来つる鶯の

むかしをもしのはれて鳴しとゝ

一月十八
始聞鶯　細川

梅か香につゝなかくうくひすの声の

春をまつ谷の戸いつる鶯の声

霞立春

春きぬと霞たなひくあさひかり

人のこゝろはなかき春かな

春きぬと谷のうくひすなきにけん

霞かゝりとみえしはたなひくは

寄生祝　久子　十三

松本天の[illegible]梅かえにかけし

ふるもよろつ代まてを契るらん

千年ふる松代のみとりいろとそ

ふるゝはなれぬ松のまことを

春風色　小西房生

松の葉のみとりに春をまつる春七

こゝろあるまつに来ても[illegible]

十七年一月御会始

晴天鶴

久方の光のとけて雲井の
つるの千代ふる声きこゆらし

寒夜雲　細野

宵のまハ寒さしらてみし月も
さえゆくそらにつゝむ雲そかゝる

同
冬の夜の嵐はけさむく吹寒風に
あくるまに生てつゝむ雲哉

河菜

冬も猶野辺のとかにたつる猶の
摘ぬる水にそよくる菜に那
由ある青と母の寿にも神されて
云さゝくる雪そきく哉

十一月十日
冬人事　家の納言

たれも見れハこゝろしも維らん
つれもなき冬の日影に
うれしさの雪もきよき哉
学の庭にあそふ時なる

十二月九日
雪中松　家子納言

松さえに降る雪に風の

林まつかね雲にこゝろを
雪折の声も聞ゆる林ハ
たよりとや人そちきりありつゝ
十二月十三日　惜年　久我納言
いたつらに暮ゆく年を惜まゝ
ふかくおもふこそしらねハ
今年の暮こそのこりおしき
くれゆくとしの名残をしくも
十二月十六日　冬夜　飛鳥井納言
山の端の雲より寒く冴て白き月かな

雪の山の雪もおもひにたえハ
霧さめる芳宮錦をそれハ
千代田のさとをさしてそ見ん
廿十四日　深寒霜　徳大寺納言
あし原の杖さへも御代の
きみにちよ千代の影ハみえ
雪中早梅　十八日
枝にのみ春　咲なる雪をさかりに
咲ちるをまつ梅を

十八年一月

新しき年を祝ふ心のうちハ

みわたせハ[illegible]

春やまた[illegible]新玉の

としの[illegible]

一月十七　名所雪　佐々木高氏

志賀[illegible]

しら雪[illegible]の浦

一月十三　新年梅　久子[illegible]

新しき年のはしめに[illegible]

我植し梅の花[illegible]

二月十日東宮[illegible]　聞鶯

春の夜の[illegible]

[illegible]

鶯の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鶯[illegible]の

[illegible]

鶯も年ふるしたる梅かえの
春の青柳にふく風の木のもと
むら鳥の捨てゝ飛立音にこそ
ねくらとふ子鶯の声々

二月廿七
春雨鶯　伊東祐命
梅か香をつゝみひきて枝ならし
春雨の中の子鶯の声々
おりゐて我庭に鳴る鶯の
木の間に伝ひて鶯の声々

十八年

春風三首
若竹の枝なれと生まれぬる
春風ふく花の香をかくるて
其外二首
春たつ夜に庭の風の香り
さへとふ出来ねさふや言ける

春

一月下旬
待梅　亨子発之

営わ庭前にさきまちわひせく
よのひねもすまちし闇を

三月十六日
公園梅　御亭公園新築記之
猶拝見新之

詩人のむれつどふ園生の梅の香に
千代のやみとも薫る末なり
いかなる梅の

きのふまて園にありしなてしこは
今日は園を来て見れは
折てしや我袖ちかくなりにけり

夕帰子鳥

わかひさかりしたち山の
露けわしたちぬ帰る鳥
もえやまつりし旅ころも
夕山の峯なくしられり
松の緑は海山の空とつゝき こゑや
夕されはきよきよるへも帰る

山家梅

梅のさく木曽のこゝちとそ
たれかれやらてゝ家の名残る

信春来

梅もさむからん様はおもほえて
としまちてみちわかりける

静見花

なかれつる春の風も露はるる
うちむかれして花をまちつき
あれはて記りの花そてまほりに

うき世にもみの心ぞ秋はあれ

風光日新　細川言

春霞立そめしよりあらたまの

ことし風のかはる計哉

きのふまていとひしかのを春にして

風さへのとかに生まれぬる哉

たれにとてよそには吹つる風の音も

きくにはかはりの生まれぬる哉

月前霞

我宿の雲もれくる月は霞みてし

月のかたぶきに霧をとまりたり

霞みぬる山のはになほ残るへ

いりかたの月まかしかすむ空哉

山花盛樹

花川のちりて流るる

咲なびきたる山吹の花

何とはのちはやぶるちりと

咲まつほるやま桜の花

霞中帰雁

あけぼの霞にかへる雁のこゑきく

さゝ絵おもしろく降る夜舟

なかに又人のすかたをゝかしとや

霧のかれ行夜はゆくら舞

みこもれる霧のかれ行ゆく夜は

ら海のそらも晩なりけむ

閨夕立

辻井やとのそてにそていさよひあれ

たのむたのひろき閨海の夕立

夕立やかれさるゝかしいそさ原て

閨もとの庵に驚かされけり

浮生蛍

冰海の岸結ひつゝねよ夕霧の

結ひてよしかは蛍まて采

庭竹深

夜をさしる夜の竹のさわにハ

こゝれ

たのめ有声を聲のさやの音

寒中歳暮　十二月十八　細雪云

我つゝ来よ冬たり寒さハと

契し

うねつゝいひやる人やとゝ建し

降つかる寒さの我やとゝ

あゝさき心しるゝ人やそれ

卯三 以書 八月 三日

御館并相済候て山方の

表紙ニ而御済候霜月

年号御書紙ニ而霜月

名称等上ヶ候由候

指出候ニ付此段申上候ニ付

書状相認候所未御陣の風

ゞ 六月朔日 行介

以書状申上候拙者挑附表風を

まゝ年号名称出さと

たのしミて名を持之の達

まゝての出来したの處ハ

国本御越

御の家の方とハかゝる稲

おし 書ニて書付候

バ 家来附 源三

以て毎によき事として家の

御の林と申まくとの

御とこれ家のためを

さしおき候国の五年

冬竹　久子

枝ごとに降る白雪は冬枯て
竹のミ緑り千代の色なる
初霜を拂ふも枝ぞ呉竹の
千代のためしをいふなりけり

冬神祇　十一月十日　赤西氏

さりとも宮柱しろく神枝の
あさ日さし見ゆるさかきの光を
たゞさへ利してあかてね　三井氏
雲よりふりつき神の恵み

冬夜の月影さえてきつねなる
西井のかたに神さびにけり

庭上冬月

冬枯れの水となるの庭の
水の面こほる月の影寒　加賀子
水の面汁して氷の
冬庭の月に影寒さ

冬雲　井上子西氏　十二月廿

降つもる雲路にいつる
枝わかれとなる雲の松

以影は形燭の松林霧路を
つきさやかにしられ見えけるかな

冬船室　江刺恒久　詠之

梅中ちこえ河よむ人ハ一和歌山
清の名月あかるき木の葉ふれ
さちあらと海人の峰をに來るも
霜にまたし浦の素かり

明治十五年一月一日
天津萩原のはしに立る次
いふかしハしき来けるに柴
霧先春
春めてみる春霞をあめと
まちに見せよ立霞の霜
十五　言友　久子重郎
何ごとかくき世に帰てうき
友ハ心の知り得る人なり
然れあはれてとやと許　云ふなる

月影のくもらひをわたしを
わたらひし古き世のおもかげ
おもひいでゝかゝるなみだかな
むかしにかへる月のうつりをせきとめよ
語て久しき友なきのうへは
さしかはやすらふらむ轉おちて
友とこひてたのしきかなかり

十二日 新年歌 江刺南郭

露もまたあしらしおもひとゝけむ
この朝ある斗たのしむこの歌

こころしきをはやむおもひ出の
あるべくなくて歌あるべき華

一月六日兼題 海邊鶴 沙未

雲の浦尾上のまつを流れて
ふかき空住まふ浜の歌
浦波の岸の一千歳そめるは
たつの千年の浜に来らん

二月二日兼題 松間風静 たかね

清風にまたもね影の松かぜは
風もふきてかをる松まつん

春様のいふもこそ春風を
しらぬと菫る氷の様かな

一月廿六日尚堂
鶯二首　信平

まだきえぬ雪もきえなむ梅か枝鶯の
しらべにうつしまさる声
何ことはいろいろ流るる荒井に
鶯のなく音おもしろかり

尚堂
夕鶯　松の人

春やまの風ふきこさば夕鶯
おりつる世たる鶯のこゑ

旅まさ日数をへてこそ春のに
霞しらずて鶯の啼らん

二月六日兼題
鶯出谷　井筒

鶯のわかよるこゑの声に
しらや春雨ふし戸なるらん
鶯の声なき折は春の夜
春しと河辺に鳴くへき

二月六日
梅に霞　兼題　永墨

うきはるの雲をこしいるる
春は霞のかねる朱かり

松むしの音に露ちるらしも宮の
さとのはかのはなにかゝるなり
秋の夜はねぬるひろ(?)しる虫を
わすれずて月に露の秋

二月十七 山家鶯 作者不知 ―
こゝろのみ我やどのところも
ゆきふるひても鶯なき
露ふつ我やどへとひしもの
まつ鶯へきゝ春まちか

春月 家の 菊生

たゞおもわれしこゝろに消ゆる
朧月夜に虫まつこの秋
あまりにも露おちぬ月影に
さかりを咲く花ひとつの秋

二月十四 名不梅 梅ちる 愛之
三春にかをるとひかる秋風も
梅の花にゐねて袖をかへる
久方の梅の香はなにかに
さきはなの袖のゆくにもをりて
花におもへかし月の影の

たのしさは梅は今さきそめし
はるを心のまゝに久しくの
なかめつゝみの梅はさかり
掩ふ薫りさらに月影の
霞は梅うつしなかなかは
月影の梅のさかりは山さく
おもひこゝの友となりけり
梅のはなのほとりに旅ねせん
このまゝはなさにかる宿一夜は

庭梅

かをるとふし家はわけなき庭の
よそりに薫る水の梅かな
きねのこゝち旅役の丈なるて
人まちかねる水の梅かな

霞寄梅

さほ姫の霞衣のたえまより
ちらりとみゆる梅の花

二月廿六

梅香移袖　水原之子

梅かをも袖にはさそひきて
いつ袖にかよれる袖の

風ふけハ沖つ浪松もこゑたてゝ
枝のわ白ひけ生すくゝ成

霧間松　三月廿て　加藤

吉野山の霧の夜のたえまより
あらハれたる青松の影

あさからぬ松ゆくこのこゑのをの秋
霧のたちをはなれつゝん

雨後菊

志賀の浦に友をも見えて
こゝもかねての霧のそこ

秋風の吹わたるなる夜半松
露かゝるのこひしらる成

霧隔月

落夜ハつゆもはれにもして
滝に霧長月の影こそ
秋風ハ霧を吹はらふ山の夕月夜
こゝにて見えそ滝生計つき

水辺菊

秋風吹さやか川の岸に咲ける菊
きのふまても咲きてしか

寂本法師

もろとに桜ちりくる山の
こゝろのおくをこゆる花かな

[illegible]落花を

さくらちる山の小川の岸づたひ
花の雪ふむ人なかりけり

九月十三夜 秋夜露　同　大炊[illegible]

秋[illegible]
こよひ空の[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]

[illegible]千鳥

[illegible]月の
きゝなれし千鳥[illegible]

同坐景

さな川の芦の末ゆくさゝ風子

ころ原く霧ハ末の東ゆく

待霧云

こゝろして露月との秋

またしくたひ稲穂ほそなり

南峯 秋霧云 古成上

稲妻ミて霧雨山にかなる

秋澄まれ霧ハ中之

いきに峰文ハ海りしな操なる

まつの山持てあまさかな

南北 麦秋 糸京ミ竹子云

青空の下ハさゝ山もゝの

ミちる小麦野風とくとゆる

ミちる桐の木のこころ

かりしほ麦の秋風

宮梅子

梅霧もちになりて梅子を

望んの秋のおわて

石ねね平竹

宮木はいくら梅ヶ枝に

松下泉

雲居の庵にふねて岩清水
月すゝるまて 殊にも松の葉 残いつる
引とめし調子ふりうく雲居の
岩こゆる浪の底にまかせ
謝ふ末のつたへ来る上雲居の
しらす夜をまてまなく

秋室風

樗の青も雨をもみて秋室との

新すゝかも風に夜ふかりけり

秋歌

山家月

若菜はけ霧ふかいそて月の
音羽かや深き山路あくるの秋

旅路鶴

小菊ちる尾上の谷に旅てなる
うつりけ旅てもれ来のなる
有られ秋と心ときめゆるし
まくらきを思ふところ帰覧 ありて

遠村擣衣

秋風にさそはれてきこゆなり
夜はの衣うつやたかさと

妹とせや夜はにまちかね浅茅生の
床ともおきゐてうつ衣かな

荻のはに露の
おきたるまてそ

衣のまた荻心ならひせぬれは

露に擣衣　新のしく荻

枕のうへ新枕の荻は小野のまて

露寒衣をうつ音はせゆる

十二月三日　初雪　橘忠正

雪人にちらぬ雲居はさえかへり
峯路はみえすつもる白雪

さゝ川心おきてちるかはおちかたに

雪かけしはらはらしきのみのしもの

四十三
情寒夜　源

さえしくもかきいつゝなかはおと
くれはきくまてとしもえこそ

けすてねさめぬる枕の身に
くれゆくはなくさまん

十二の九

秋露　前中納言

本精の浮の月拂ふなり

しはし千里の雲はなり

露けくも浅茅か芝生の

毛衣にをきてそむくらん

閑居雲　東中納言　行家朝臣

川ふる人の結ひたるあき

この朝のあしたの風

新ふる宮河の岸のこころ雲

秋の花高瀬なり

冬宿

つれなくてもかよふ外の

うらみ雲もまさる

峰の雪枕のあたり芳生

詞か宿かる外

冬山　前中納言

み山の雲と重ねて松にも

冬さへこと生まるる峯

月影もかりし冬されは

雲かかる峰の秋

山家雪　信光

たれかまたふりにしあとに山里を
こゝろのまゝにとひもくらさん
やゝもせはふみわけかたき雪ふかく
雪もこそ茂ける心ひとつにおもはれし

旅和雪

きのふまて跡たえてよに和雪のゆき
ふるやこたかへつゐる庭とみて
乱ちるかけふ袖にかゝるゆき
ものゝあはれに和雪のなかめ

水鳥　信実朝臣　写之

あぢむらの網やとけしつらゝの
家のこほりもさえかためなり

寒夜

よるつもれる雪の月のひかりをみかきて
こゝろつよくはいなしのそれ松
月のほとをもちてたらねはちかく
こゝろのとくさにいなしの庭の秋

明治六年一月十日

試筆

あらたまの年たちかへる朝より

我宿のかきねにちかくうつりけり

鶯の声かはるなるにつのれる

わきまへして祝ふ心はうれし

ゆたかなる御代のしるしやあふぐらむ

うれしきはうつりのあさかな

一月十六日

雪中梅　作者名

さえかへる宿の梅ハ梅も春かぜて

さく花に雨かゝり咲そめにけり
夕霞の日影にかゝる中垣に
露に薫りて梅咲にけり
冬枯の日影のとけき朝庭に
おりしもさける梅花さく哉
二月十四日夜
窓前梅　まつの翁よみ
我窓は梅とおなしに咲ける哉
ゆかれ人まつとわれねるころ花
紅のつまそむかしかゝる梢の
梅にさへる窓の梅咲にけり

月前梅　梅さゝ子
月影も霞わたりて神垣に
梅の香もあやなき梢ゆへなり
月霞む夜にまさる梅の風薫る
梅さく窓のうちの見えつゝ
二月十四日
梅に露　まさ久子よみ
咲そむる梅にやとれるあさ露は
玉のかゝねのまくかたむらん
ひらきそむ窓の梅の雪露
ころもかゝる花ゆえに付きにけり

一月廿八
庭雪志　鈴木一重氏ニ
おもしろき事あるに松は庭の雪
その千年の影ふみ計ぞ
はらひ残る庭は松ぞ雪ハ
千代も常盤の色を見えける
一月十六日詠草
孫松　久子ニ
おほかたの松の孫のいとも
このまたも松をもて加ふなり
山家雪
あるまくに静かまの家て山さとまで

ふりの中より松はふりなし
暮雪
あまつ空の雪をもへにさみに清
こともわる花と生まれるか
二月廿
養術延年　細谷氏ニ
家人のつかふ心も立てまろか
そのいとねきもなりけり
わかれたる都のきねかはいかさき
ふる人なつましてまた見えて
松しまき大天下にいつなきまま

うつなきもしほにもひけり

一月十六日 海上雲 俊子よし子

浦とほみ海人のたくものけむり雲
にほふしく千代の夢ならなくん
嶋山の雲まく千代の夢路をさそ
はてさそふね風のおもての船
とほ浪のはやて手にまとへる浪
かもゑ/\移る寄ける浦雲

二月廿六日 初春霞 ゑつ子 紫ゑ

あしこの野辺ハ千ちりして
ふしし千代の玉の緒つなし
松風ハ来る浪のものしろの
千代国の杉ハ玉よろつ代

西家月

かりほせつ西にいねさしせて
月ゐる人いかなとのりかへり
小山田のほとりに我はねぬるを
よそのみ月をかりわたりつ

書窓月

書窓のしらへ窓に静まりて
よみわたり月の影をとめかね

窓霧

霧こむる外山の末消て
窓いましあけまいしのさえ
おほろに窓月影うつろへて
霧こそこもれふのかしける

冬暁月　十一月六　梅之や

霜さゆる暁月夜井てらし
さえてるものとはしらぬる
霜さゆる夜のやの影かほりさえて
暁さむき月けしきかな
梅香はる枕の上に霜さえて
明るくさむき月の影の形
暁になるさ風に梅匂て
暁さむき月はしのな
暁のそらに雲もなくてさえわたる

衣手にさむき月の影哉

冬舟　十二月九　木宮重郎

湊江のふなよそふれは夜半あらねと（入のままと）

ゆきは静かなる冬の舟

木枯は峯も静かなりし山里

おのつから静かにてさやかなる月のかな

こなたふき千里も奥之

冬の行ならぬ冬のうれは舟

竹ふかきもおもねは千里行とは

冬の夜はなかきはさかり

冬月　十二月十日　鶴重郎

木枯は嶺静かなりし山もとに

おくしもさえてさゆる月影

稲竹の影おもむろに行ふかき

冬の夜のかれ野にさやる月影

稲穂はさえかれかれ月影に

さらぬ雲やる冬の夜の空

木枯にさそふ雲ふき山の端は

いつも冬の夜の月影の影

寄雪祝　二月十八日　相宮重郎

まちわひしのたちもの袖を牛かちみ
雲まよひする霜の代々の秋

氷水句　十二月十日　何木

日影にも江の小雲まあらそふ秋
水の床をうし谷ちちの行く
日影にも江の水にさえさえて
をしけるき捧て字ちら東武
おもふ紅葉の冬雲重ねて
心まちまさ句江のをしかも

時雨句　同十一日　何木
沐つき霜しけ濱千鳥静かりて
吉野原出てつ中る雪の秋
紅葉こころやの葦辺の朝のし
夕まくふかる高遠の宿
冷えつつ心家ちさ雲ふれハ
おそふらなる淡路島山

冬梅句　同十三日　何路
冬枯のなつさと他し梅やの
ちちはくれ行く冬の錦哉

山路萩

いこま
野山谷のおくある木陰に露おきて
萩の花咲きて秋来けり
旅人の山路はるかに振やきん
山路の萩に見えし夜をいにけり
帰るさとうしろの秋の山路に
あかぬかなしき萩ぞ萩の花
〃 秋風

稲衣重ねわかれ生まれけり
秋風吹きゝ河原の宿を

河原寺吹く風の音ふかくして
わしのすゝきもうら枯れにけり
露に霜に結びてある秋の暮を
ゆく袖さへ風さそひける

落紅葉

しひの葉を払ふ落葉にかゝる
紅葉ふたゝび手折つる哉

村擣衣

袖さえてねぬ夜に露はちる衣
うちたゆまねの衣うちけり

物尽ふことはわかれをしきさよ深く
こゝろしてわか身を捨てさゝなる

雨後月

あま雲の衣をかさねはや捨て
こゝちよくはれてさやける月哉

江村

しら浪のよるかたし江のさゝ舟を
つなきとめたるあまの小舟

明治廿一年

一月七　傾室正射　水京云

おもしろき年浮世のよそふあり
きよらのかたに友をまつらむ
春風のしらすたゝふこまの湯の
ねとのかなる年をまちえて

いナラ　橋上霧　依本云

我宿の人影こに橋のこえて
江のなかれにたつのおちる
ゝ流れてたちよのながれに霧おちる

こゑよりも霞にこめし[illegible]梅

十六
新年霞　久子[illegible]

あら海のおふ浪までも霞さへ

ことの葉の花もさくらもまつて

空そよ春の気しきを人ことの

おもひつゝくらふの霞らん

六十九
新年待鶯　清之

梅さく[illegible]年をこえて

空のをしまたとせ鶯待ず

[illegible]この門を鶯待

谷の[illegible]ますや[illegible]くにはる

六十二
雪中待春　伊東

いそしきまつれわる雪中の

[illegible]のとしに春待日数の

末やむ春とまたぬ山雪の

いつも[illegible]雪の[illegible]

鶯の[illegible]鳴る鶯

なれにそこの春とまつらん

二月十日
餘寒　[illegible]

山の端[illegible]一[illegible]

庭にちりしたる萩か露の秋
名残をしむ外山の秋風に
志てゝ手まて露も秋露
露物うき秋露に流て露も秋
おしらの花より外の秋山

題 河上露　京子

尾花や錦をしいて花にかゝる河
流の上に露の秋
流の上に露なる花をさそふ河
小舟の花を錦とよふ

川辺採　三月下　梅之門

峰に出る人は萩の花の萩の葉かな
つゆにさそはれた萩の秋の露
志ほしを露袖に志ほれ
我か袖の露やさは萩の葉
白露をつみ河の上の小野さへ
萩の葉にも萩の葉に萩の花
いそかれ露志ほしらをかり
萩まちやたらさ萩ねと
露草衣　有[illegible]　小紫

たなはやつの里雲山と見ゆらん
霞める衣きさらきにけり
さほ姫の霞の袖やかさぬらん
あさみとりまた遠の山

野外花　三大人にあたへしこ

桜さく山路に宿ふかれて
ゆくへきかたも忘れにけり
引とゝめ駒をなつさふ野への
つゝしはしはしさなかのそら

早蕨

蕨

さむれねの雪ふるれは早蕨に
わか野に生て春来にけり
岸谷に折て手にとれは
折に〳〵しる春のさかり

春暁　三月廿て　大庵奉まゐらす

明ぬと花はるゝに咲白ふ
外山のまおもかけの月かな
霞たつ尾上の桜あらはれて
明わたる空に霞の春の頃
横雲のたなひきそめて

やまとゝてゆく春の山は帰

夏夜

壁代もことしに入て夜ことに

まくらさきの月にまくらたえて

又秋茲
吉山の字まま絡らむところは又への条文字

これなる簾の影もたち流れ

風のきさらしつきの来るかり

河原納涼

船ちかふかゝり火を河ちどりの

ちらすの流にさそはるゝかな

六月廿
廿五日巳の月
諸本重院請し
来り擬え

玉ほこのまくらねずにほのきこえ
なれもこひしと帰るらん鴈
ほのかなる雲の上を過たりし
声なりけり夢にほのきく枕
ほのかに帰る雁は遥に
むかしの人の声を便りの秋

擣衣

艸しげき野辺の河の流れの
ここにても衣うつ声
為永冬之

春雨の名残の霧のはれまにて
いくたびか行かへるの鳴くらん

聞虫

寝覚して人やしらん秋の野に
跡にきえ行く虫の声かな

庭萩

庭の萩ふく風の心ならむ
ちりくるかたに庭の萩原

深夜聞虫

水原重政

露おける草のたかねと鳴きて

庭ならふきかへしたえの秋
なにはなる穐の盛の蘆ならて
槙ちかう玉藻を寄る

橋上月

山の端に夕ゐる雲は消えにけて
月こそわたれ谷のかけはし
かは清きさのの舟橋霄晴て
いらかをつゝむ月は霧かれ
霧こめる月かけ見えぬ木橋
あやなくもたれわたるらん

こゝろさの林かねにこそ君か代の
光添ふ月の面影そさす
宮人の光とそへてこゝろきの
林かねに月に月をまつ添て

月前秋

秋霧の色つくしらくる山
つまとふしかの月をみるらん

河辺霧

立わたる霧も林にちかき橋を
しらてかへるか空の雁

かゆくハ袖すりあひの衣かな
おく霜やつまふのしもの哉
十一月九日　宮平様　中将公子　御三十五歳
常陸宮御名を残して
残りけ菊の宮の桜の花
松ハ霜ハ夕影にも宮の名
露さへも散りて松に名を
十一月十日　寛千代　京御所
後の月静まりて鐘の音も
木枯ハ雲居松も静まりて
寛光も千代に千代の花
心ちハ夜もすがら　寛千代
なつかしき人も寝らぬ夜
十一月十一　名月　水京
峯高く松の梢て其陰の
幸いたまり月の影
清らに吹きさらす
残りの月の名残の月
水のもとの名の
心にうかぶ名残の月
木枯しは静まりて雲

月いづるみねにミえけり

寒時雨

霜ふりし森の月の影消て
おとろきやすく降時雨かな
寒の森の庭のおもにしくれ
青苔のふつかと生ふなり

夜神楽　細屋

ミつ〳〵の声の小夜の村さえて
さへ松かりろき神垣かな
和泉

翁さぶ寺の不破の中ぞ今宵
冴え神楽の音は更けぬなり
拂ふ翁の筆ぞ照て霜を
露もこそおもて翁さびなり
小夜更て翁さぶ森の音ぞ冲し
神山のかげは音は更け今宵
冴ゆる夜の音は降り山ぞ雪
人翁も風さえて音は更けぬなり

寄雪神祇　十二月　水京細屋
し

千早振る神のみ翁さびらむ

はらくとせしつもる雪の朝
まつ子に庭の跡のくま　秀秋
林の木梢につもる雪の花
峯の雪もいつしの跡ていそら山
まきにそそのしつもる雪哉

煙芝広る

降つもる雪もしとやむねて
ひとつのかくふかれは雪なり
おもてはひとつのかふかるみて
こそなのあへは空とらなし

こかなきまひ出たね垣の
おもあまめくふしのまきねり

梅室雪　佐々木秀秋

冬籠あはのつる梅子跡のそ
梅室の雪ところ人やられ
船すきに冬の程そなはの
むかし半ともつもる雪の朝

歌寒夜　秀秋

あらしき年のまつ冬ねるなに
こやらぬあのあけたりけり

春之雪　信来(?)

春としの雪ハ降て山まつと
うち霞て降つもる雪の松
かきてにハつもりもあへぬ淡雪を
春のこゝろ知れる年(?)
このあさまだき風ハ静まりて
春なれハ降つもる雪年(?)

雪中友来　松の乃(?)

待つる心のゆきに春の名を
きてとふ人にかれぬる年(?)

寒霞(?)

おもふ事の清のよそに(?)もく
なとおもねとしのきこえぬる

明治二十二年一月一日

今日ハ一校の始業式にて

おの／＼学生のもの来り

あつまりきたりて之ハ余か

賀を述ふ心地こそすれ

格別のよろこひハ立分り芝州の

まゐるなりやうちふおもふ行し

ゆかしたき学へにおもひあらむとて

今日の友ちかうちかうなつかしや

新年口占　一月々水京

なしたてハ霜なき山のすそ

霧をへたてゝかすむなる哉

いつ詠り

水をうき大空高く以の詠り

のかゝや風のちりゝ弾覧

風寒き春立る梅の香高く

こゝろしらの和を、いつの和うれ

水之梅　平　十文字は

為程の水を涼しく日高の

示この岸辺梅咲候子なり

春梅咲き薫るにあひ子

訶来の梅花咲候子なり

早梅　十文字

雪そて年のまたはなをやまさ見

坊ねの梅花咲候子なり

名のある色もしろき咲候子なり

坊ねのかゝの梅花きむ

梅下にハ露かこの下日影さし

水際の梅花も咲候子なり

川風の葉ゑれねとも

まちわひし梅か香そする

初鶯　家重

今朝ハとくなけらん鶯の

ねくらの梅の末葉なひくを

鶯はさそはれて初音をそきく

こその庭つきとまりて鳴ず

来てにほふ花のねつ鶯の

かよひふる春のわかさに

暁天鶯　松の

いまた初人はいつと思ふ鶯

ひとりして伴鶯のこゑ

暁の友なくききねての

をちこちの鶯の音

志るはいまたに伴ね暁の

うねてまちわひ鶯の音

梅花久薫　大江

ほのかに今に薫こそ見る花

梅さく宿にふりしより

いまさとかくて峰に薫

北窓の梅のさえ限りハ

祝言春　二月十二日 御題 上云

百年つもることしの春をむかへて
ゑみかはしさらに春をこそ知れ
浮人の心まて猿をふ君の代の
万よかけて春をこそ知れ
咲出る花の数のさくら[illegible]
さらに[illegible]まて春をこそ知れ

霞天梅　二月廿二日 梅[illegible] 上云

霞みなと天の[illegible]かかる霞の
松のみとりに薫る梅の花
霞にもかくれぬものはにほふ梅か覧
霞月夜 梅の匂ふを
山かけまて[illegible]花[illegible]風に薫る也
ちるは[illegible]さき梅の下風

梅香新　二月廿二日 行[illegible]務[illegible]

吹しきし梅の香にまきれぬ
わかたちかへる色は見えけり

春中鶯　二月廿二日 [illegible]家[illegible]

鶯の声[illegible]うらやましき[illegible]
春[illegible]

新日さし氷の池の柳かけのこと
つまにたちかへる岸の錦ら

春色新　有吉　加茂右衛

花さかぬ梢も春のけしきにかへて岸の
人の心まで春めきにけり

枝のこは柳も桃も春をしめりけり
さいの手に似たる春色のこの花

浦春望

旅人の手にかけ春の沢辺に
ゆるしきかゝるこの柳かな

新年鶯　井上　言

春きぬと風もしらする新年
初ねにたつる鶯の声

六二未夜

夜井　　小出つね　新作云

さし汲井ゆふを心にまかせつゝ
汲夜はいかばかりくみこゝろまし

庭納涼

さ寄る夜はねれても涼しきは
庭井の清水掬やまつらむ

夜井

日暮しも秋を思ひ寄らるゝね
よるさと涼を一府はよかまゝて

水あまる庭井のかげは涼みする
夜をよるにて出ぬる哉

日暮の露もよるに我宿の
庭井のくみてくみてくむ

夜月　　久子云
姉坐之匠悼

あり明の友を見くいに夜もすがら
ながめつゝ涼しき月の影の秋

°夜はらの月も哀によるの秋
なき人の友をなつかしみて

新
茶居稽　　はし新秋

むかしより月にまさりてはやくへ
実隆二十ヶ年不出来　案
月影をながめつゝ過にし河
こゝろや君は千代もまもらん
ちよまつりるさをあらして
くらやまうるる一夜の宿舎

河夜月　川淵堂

墨田河清きながれに夜のよは
月の影ぞよるすさまじき
夜の空にうつる影は星河の

きや影をうつる月は影の秋
さしる河水照りは芦のありけり
影てらすあるさることの月

十一月九日 兼題 隠逸忘友　　中島うた子

○とは我友垣のまとゐりハ
まとゐ斗りの場て来ぬらむ
捨てのあるりハまぎらはして
心のとこそかくるなふらん

十一月十日 山家雪　　赤(?)某(?)

大方ハかきてと来し山の緒れ
千代のまちハ雪路なり
本にかふゐ見ハ山雲らは
まつハ深きふかしわが来

冬ノ夜
ま風吹しくきえたる山さちし
急わたしはきすハてそらなり　　網(?)某

同十二日 寄雲述懐
たのしけハなりし雲路山
ありしこととと青来なり
花さてみさまつ山ハ出雲の
わかれてのちハおもひなり

十七 名不知千鳥　　大多(?)某
これのこう千鳥すなきを墨田河

あの程友ゝ今や仲よし△

十八　深みる　　　吉の人

深みの下ゆく水や曇るらし

枝葉と宿く　かけのことく

露つかる紅葉の底に重ねても

冬はみゆる　深のなりける

十六　吟　茶露　　　梅

吟の落葉きゝの毛紋の花露と

わたりしてまた流る露筆

玉露と露かへてしれ吟の

冬ごもる流る紅葉の花

城も上手友に吹いり

名寄祝　十一月廿日　以亭

鶯へ手のひらの影はく宿く

冬の行ね不審集　楽

冬いもの宿に宿いもの

立さく寒すられ世なり小

十二月ゝ　寒千句　水宗

彼流のと梅の始め拍子

ともさけられてこ千句集

岩山の雲にかゝる千鳥
ほのしら夜のあけてゆく
十七　水辺千鳥　清水
いさゝけに棹のさしゆく川の
岸のわたり千鳥なくなる
をち河の岸のうへや京の風に
おちこちにてなく千鳥哉
小河の岸の名京風に
おきつ千鳥の立まよふ
十三　冬鶴　露久子
ありあけの八千代重ぬる毛衣の
行ての空に向ふ寒の
十五　冬氷寒　清水
霜さむき夜のしらむ墨田河
汀はなれて立千鳥かね
枝末にさゆる波こほるくの
和歌の浦ハ雪ふるらむ
寒竹

おねこえて虎渓の橋ハ帰らねて
遠霜ふかきゝを終ゆきた
風さそふ深山の嵐絶ゆる森を
あそりに寄りておなる霜降

名所霜

宛名山紅葉の枝におちくれハ
霜に朱ハきえくれてもなる
名さの浦わたる橋の霜を
友待鶴ハ霜ふるやられ
霜にふハよもと添ひしと墨染
ゝまけ給て本を折らね

枯野眺望

むさし野ハ色のゆかりの草枯て
終もなきの末を見渡されつゝ

明治二十三年

寄織女　　一月廿日於家表題

年わたる神もさそふる小舟哉　待つかね

あまの河寄ハなとこそゆきと

新年之雪　　八十三　久子

あら浪の浪にうつろふ松かえは
かはらしと契る千代やしるらん

海辺霞　廿七　信之

久方の雲ゐとよそにたつ浦の
うらやまさきそおもふころかな

さそちかし霞おりつきてよせくるの
浦伝ひしておもふころかな

新年雪　廿九　信峯

松もまた白雪ねとしけちしめかふ
春霞たつミもこころあるかな

今霞ハ日数まて幾重立
世の中の霞ハこころなるへし

あら玉のとしのはしめにたつ霞
春のみや千代の色そそへける

新年霞　一月十六　梅

津の国のなにはの浦ハ波なれの
あらたまのとしおもふころかな

のとかさにたな引く大海の中つ
いろひらかなにおもふころかな

春霞　二月十六　ミ竹子

梅か枝の梢にやとる鶯は何かゆかりの
春をしつける声のかはるらん
梅の花の梢にさきて春の日や
千代をことほく宿の梅か香

梅始開 二月六日 翁子

ふるき年冬よりの梅のはなさきて
春のはつ春を生まちける哉
錦ともこのきをけさはやいはひおもしろ
今朝の梅の枝咲初にけり
吹風の薫ひするまてにほふなる

此宿の梅の枝さきそめにけり

庭梅春 一月廿二日 小出

河水にかけをうつしてさく梅は
いく年の千代かけてさくらん
今日よりは青柳の中梅咲て
千年のうちにもかはる宿の花

鶯有声 い丙生

初音より声をまちしかほのかにと
夕日うつろふそのさとに来て

立春山

立帰の山きの霞まて引立て
霞もや春の下ゆくらん

立春霞

朝日影おもむ年子あらねと
まちまちかつて霞そわたる

初春鶯　有十六　大学衣

鶯ハ春とくかね今年今来
谷のふるえを急ぎ也けり
鶯の音聞しらむこのころく
あさみね春と生まれける　二の丸

新年祝　宗津丈

おやさうきる著る衣の袖にの
声ねをよるたちもしこれ
万津世のみかきろひきそて君の恵
をさまるみ代そとい八千代なり

梅薫風

きのふまて心もなく風もたかきハ
梅のさかりふかく集なり

雨後春草

春雨の名残やみて緑ミ糸の

きくりの小松ちるこそあれ

二月十四日 寄花懐旧
古今亭友

やよひ侯の花をちりしまかはと
ふるのまさね子 契りのかし
霧こ宿 あれとも絶てる
友とこそ思ふらぬかな

正兵衛

咲きのね折ることのよしの山
みふきちの井にかゝる

六月十五日 久子ニ云
采位

むちしてそ 押へかきよしきさの
露をとこそねて 乱れもる秋
かる人を 輪宿守 れとそ
こゝろ露小萩 木 案
夕されたまに 吹ふもる
むらこの露をとこそねて

九月十三日 作于 延 菊花
夕七

虫の小萩露ちる 夕庭
偲ことをる 虫ぬ きこの秋

庭雪　十月九日

見えぬまでふりさゝえて加茂の
雪ふみて人なき松の霜の朝
ころも庭雪に風の静まりて
さえわたる夜はなほ寒き
遠山雪千種の花もうつもりて
雪は雪の一本松なり
山も麓も白くなりぬるころも
高嶺の雪は雪の朝

冬ながら千年の松のいろもなほ
雪ふる松をこそ知れ

冬雪

かくれたる松の下なる
なかなかの雪と色とかはる

年内梅　十月十八日　大学校

新しき年のはるをまちて
こゝろをのせて梅花かな

庭上初雪　十八日

いまはたゝつもらぬほとに庭雪の

景近
廿之年の分
さえて子らゆるひらゆきこゑ

月前笛

月きよき御芦の原の露分て
ふく笛の音はたつの浪かへる
高殿の梢にしらてかかりける
月きよくやくる笛竹の二声
峰の庵ふたたひ音に笛竹の
月のかけやとる手ふちの笛
梢の嵐は月きよくやくる笛の音は
たのつる舞にしらへある笛

松雪

降つもる雪面影そたれ松の
千代のみとりもうつもる雪
さゆるさへ嵐の音なき松も
しつかに重てつもる雪の華
呉竹の葉ならし竹月の影消て
うつもれしつもる雪の華
山さる松につもね雪る雪も
うき世のこその松
松の下のつもる雪の影

ちるこゑれの香もせぬ

梅之霞

梅かほりちらしかねけり山岸の
雲つかね玉かくれの秋
和歌のうらの梅の花かも袖の
おもひの山に降わかれの秋

雲中鳥

わか身心もの(?)て墨田河
ゆくこゑて梶とるなる(?)
雲風

梅の香のおきところ
紫の風さえさゆる夜は
又秋の雲にかへりわかれのきえ
よそにさなる夜のおもしろき
雲梅々て声に松くゆる
花の雲風さそふる夜は

月前千鳥

おもひ夜の月は影ふくて
天の川原とふ千鳥哉
かはかせの月の来る月さえて

しく月にきえし峰の千とせ

山家霰

小柴垣ありとはきこえて窓の
霰には人のおとつれもなし

人めなき柴のあみ戸に我宿は
清くたたくる霰のみ

十六日 雪

ふりしきる雪おとしてはかなくる
音にこそ聞えはしつるを

窓千年松 定平朝臣 綱常

浜人の網けふまで友千鳥
いくよ経ての末かはらん

風なきに浪静かなる網の浦う
千代の友よぶ松千年の雪

家々寒菊 日満

おりはきゝ年のはじめの松いかさい
情もおりしもまたえぬかり

山ノ初雪 小出紀言

浅茅生につもりもあへぬ初雪を
外山の雪ぞ見えつるかな

名所雪　淀水い

末松のかみわたりもしらくもかくれて

こゝろすゝしき夜半にかくる峯

早春梅

ふるとしの年のいそきにまきれしと

若菜の梅の花咲子ふる

あたらしき年まつ宿の梅かえの

ふるきをすてゝ梅咲子ぬ

早春　久子い

冬つけし鳥も今は若草さの

わかるゝゆゑにみちたる秋

これのきと思ひしらむなしやで

今こえてもにまちゐる春

寒雲　安子い

かきくもる空をさえひまてき文

雪降家のかのまの風

さえてそ嵐に家は静まれと

冬の夜の雲をのくらもり

吹わたる嵐の末の山まつ子

家まふりてさえのうら梅

早梅

立霧の日影にかゝる松原の
こゑきこえてほのかに鶯ぞなく

社頭雪

千早振神の山の榊葉に
しら雪のふりてつもる雪哉

雪三首

あちこちの谷間にそゝく雪ぞつもれる
ことのはもえこそつもれる雪哉

山家月

水なき山の陰ともみえけれど
みとりあるよもすがらの月
さよ風さえてわたる山里の
月よりさえゆく木のまのかげ
秋の夜ながきよの月をみる
わたる月をみるにもなくかなしき

寄千鳥祝

山初雪

山ふかき落葉のうへの初雪を
深くつもるとみえしくらしを

ゆきて又たちやかへらん一むらの
くも間にみゆる春の山桜

冬井　小出為重

松をもる影すさましき冬の夜の
井のこほりに影そうつれる

山家月

都まてなかめし月をさそひけん
山深み今は都をわすれけり

寒夜擣衣　服部

あらし吹く寒き夜すから衣擣

わかるゝもまたこえて枕によるなり

浦千鳥

浦人の舟のゆくへにひく網の
ゆふ浪にたちゐる千鳥鳴
あま舟のともやの波に跡みえて
さえわたる月より千鳥なくこゑ

江冬鳥

江の面に風吹あらみかゝるその
蘆やそしの白さに雪絶
さゝ浪のよそにそ空もあらし

是ゟ
文三年

こゝろハ雑えてみえぬるものから

冬雨

さりとも経ぬる冬の日数
雨のふりしく音寒けなり
空にかゝる雲ハきえても空のよ
ふきハ雲ゆく冬の雨のあし

庭上初雪

霜とのみ見えし庭のまさごに
あら雪ハ庭の御蔦も
書歴年　十月六日　梅

年ふる庭を降りつもれハいとゞ
らふの入ぬる庭のおもに
松風に庭ハかゝる雪ハ
わけ入る跡ハ有ともなし

十月十九
寒水鳥　東の亭にて

鳥たつる人やなからん浦より
今朝ハ霜ふる江のおちこちに
朝日影さしのぼるともちらさで
玉藻の床にむすぶ水鳥
朝日影さす岸のうき草の露消えて

おもふことなく越えてこそ

茶屋聞鶯

たちよれる人はしらすて竹の
屋静かにて聞く鶯の声

池水鳥　十二月十六日

むすぶるもなりゆく池は
えさりそね池のみぎはに
遊びつる鳥は絶えて池水の
こほりのうへにあかしつゝなれ

海辺雪　十二月十六日

雪ふれる峰の雲のかゝれるは
わけも未来ぬ梢なりけり
寒山のやまおろし吹きあれて
しら浪よせてつもる雪かな
浜のまさごや静まりて千鳥なき
おきつしほ風今宵寒けし

早梅　十二月十六日

ゆきもとしわかぬ冬の梢は
兆陽の梅は咲にけり
霜のことわりなしや春も来て

くもりける枝に花咲けるかな
かやうこの心も枝にかゝらなん
ちる露に花咲けるかな
新葉久　十二月十四日　深木
かきくもりかゝる雨をおもひ哉
山深くいつまで新葉の草の葉
おもひちなみに御芳生みゆ
名をのこし新しき筆の跡
夜雪
三更にはいく夜もなし二夜ゆきて

み橘のかげにおもひつゝしらく
おもふまゝのかげに雪風の
きえのこる名をのこすらん

明治廿四年一月一日

あらたまのあしたゆかしくたちそめて

ころもかへぬる春をまつかな

いつもあしたのとしを迎へ

うちえみて下毎にさ

ときはなる峯と孫のこと

ふかきそのゝ竹も春を迎ふ

一月八日　庭上梅　水原

春寒み梅の花さへ飯をまち

つぼみしみはなのはなさけ

紅梅さきのしつもりの玉椿

笑ゝ机辺玉や濃すなり

庭つゝき若竹ゝ庭の紅しけり

梅ゝ訪ひ恋蔵るわして

まゝ読りゝ浪ゝは[illegible]我つら

つゝきゝの光けやつら△

一月十七　探梅　信木

大空のまゝの年旅て眺むらん　ときはの奥

はるに千代を世えちらん△

久方の雲ねの庭[illegible]

うらゝなるかをりふく風

試筆　[illegible]

始まる年も先きのかゝれけり

あらたまの年もかはるのうれしさ

若水をほらそてあらたの

としのはけ発ゝの[illegible]かなり

座外　一月十三日　[illegible]

窓外との外[illegible]ききらしさ

[illegible]のゝきうし紅ね宿の梅

[illegible]うしと[illegible]ね[illegible]さそゝ人子

いかさへつらきの竹なり
こゝろさへの夜はすゝしきあかるらん
竹のはやしに吹かせにのなかねと
風ふくに窓の竹林さはまして
吹つたふる打にもそより
さかふにも絶てふる竹垣に
千世とめぐる宿のかこい八

庭之梅　一月十六　深本
春路

冬枯に庭にさけるあらまし
梅ちかき花にさゝかに

月雲の夜ふけに庭の梅
かをるやまかなしやとへむ
なし梅かえ人の家路に
あかる夜庭の梅か香

早春梅　二月十　京の香路

こなたふ香は梅をまちかね
梅の花さく人のかへり来る
若菜つむ小野の袖に如何
田舎のまちに梅のさかり
春にて日影さす梅か枝

ゆき汁てもおちひきて
まつひろ上のふいゑぬやうなる△
すゝ松つゝね青松の中松て
春る子しく松八をこそらるまかつ
ふりふ紫ぬとうゑ絶して
竹間鶯　家子重氏
呉竹の世々に鳴らし鶯ハ
なかしき音をわすらされ
枝よのうち鳴るおとさひし
竹の世につれ鶯の声

しれ竹の林ゆわけはほとて
名りはとゝふ鶯の声
古寺春月
夕霞ふかきの鐘ならして
花人の古寺霞む月かな
夜雲の世つゝにしるしらる
形残古寺霞む月かな
雲雨存
消のこる雪の霞を
なほいつら乙こえる霞かね

帰雁

一つらにかへる柳も桜も見えて
こゑはかりして雁はゆくらん

字帰雁

天かける雲路をここそ初雁の
声はかりきこえて過ぎ行

同廿三日
江辺帰雁　松浦貞通

にほ鳥の游ぶる汀にかへる
風のさそへる方に雁かね
風もなく枝を離れて汀の
ころものとこそ散る桜かな
桜散る江のうきはよるなきよ
花の村ろは風を散らす
風なくて白たへての花流れつつ
江の小舟ゆく花の村なく
吹おろす嵐の末を江にみえて
たえてこそ流る花の色

おなしく同坐
落春鶯

花ちらし花への春もそそ
梢おもくなく鶯のねをまつる

さらしなは隈なき月も山里に
もちつきの駒に霧かゝる

寸河来

草露

虫の音は世にも久しき秋ふかみの
草のはら露の玉かゝる

山家紅葉　寸河来ゟ　御しらの高嶺

ほとゝぎす山は誰か見よ秋風にさそはれて
さその紅葉まさるなる
山路の奥の朝日をさしそへて
まとひさらぬ紅葉かな

以下
4丁
白紙

於同家会

冬霜　十月九　於予亭兼題

霜寒き朝の原の散る庭の雪を

千年の緑にかけてしらしろう松

霜まよふ若菜摘こそ見ゆるの

松風にちりくる露のかをる空

霜さゆる夜をふかみ見えしろの

寺へゆく寒く寺の鐘ゆる

霜れ　夕時雨ロ十九　小出つるよ

事物をとを行稀く覚えて

ゆくさきにしはし侍り多来

夕風に庭のつはき静かにて

水鶏さらしに侍

一 神かけてすゝしきはしれは衣

浅き千鳥

渚からおきを離して霜高

よのしもれしに千鳥かな

雛飾蓮　十月廿日　京の画師

花葉の被はこゝろねをしらん

雛や声の冥と集来

秋の被は共に寒い名残れた

よ雛の葉も集来名

十一月十七日　鶯松　罪の子

こゝろの夢さむく山ちかき

冬の夜はしはしきりかね

老ゆかはねまを末の山のまゝ

冬の夜は雨としはしきりかね

十二月　寒夜蛇　ふし

さえわたる霜夜は寝をかゝへて

十二　かくるまのとかし　むし

伏す雲とかくれて安き侍

霞とも雲ともしらぬさくら哉

社頭霞

廣前にあけの玉垣の跡さえて

榊葉につもる雪の影

霞にはいまだ雪ふる風さえて

林の梢は人影もなし

十五日

寒夜擣衣　水京

冬山の吹おろす嵐に擣衣

鳴けば見ぬ人の夢路にて

をちこちに衣の音す

風さむみ夕暮ごとの衣うつなり

十四日

霜夜擣衣　信京

夜半に聞く衣うつ音の夕へに哉

霜のふる月の夜もすがら

吹風に音かはりゆく志人も

月に打枝の衣の音かな

十六日十七日

寒夜花　松木

まゆにしぼむ野の木の葉

春の日影もなしの露の

十八日

立春雲

おもふ事を稱にかけてこたふるの
こゝろゝゝ絶まよふころかな
縁つたる春のしつの手やなに
あやめくの綾の糸も世の中

軍營梅

たけのゝゝ陣の木陰に
花よりも梅咲にけり
武士のやとの梅かをるかな
来ぬるにちりて咲白梅
来ぬるの庭の跡

いつよりか梅か香さへにほふなり

冬鶴

霜の夜の霜ふかきよるの
夢は深雪をなきけり
かきくもり雪ふりしきて鳴て
あしたのゝゝのあをそら
霜ふかき飛鶴
千年のつるかな

廿六年一月

やまひにふして志ゝ月より〳〵

あめのふりける日いときよく

まつとのあたりたかわるふのミハ

志らふるにとしをむかへて楽

去年のことを
おもひいてゝ

ことしはやまかつにわかれて

こぞはいまも春秋に世をへて

一月七日晩景
雪海辺

降つもる雪ハ山のしらゆきと

故の人や雪とこそふらん

松の雪積てとけすさえて

雪ふれは初中ちるふのひの宿

四十七 深川 新来梅

こゝのへもしおくりみえ春をかくして

清志なき梅もことなり

四十五 露 云友

林なまこのやつら余分なり

友となるへし形のうちなり

身をほろひてうちまかせ今も友垣の

林ありて加てるとも命

四十六 深川 新来雪

松のうへ花の枝にうちに降雪も

きえて行くやつかまりなり

新しく来るも今云雪なり

こうきやかけもつかるる雪の命

四十八 深川 此紀

風やもよくは残る大さの

本おくるあめ紀わかるる命

宿のある流人のせる柄ところて

沼なしらぬ鵜舟あらそふ夜の床

日向生
水邊萍

かゝりつゝうきにはなれてたえてふ

ちりひろふつまも萍の床

あかしとも霧まも田川の岸伝ひ

ねかひ
くみてみつをつなしつゝ

廿日二月
梅綱書

東の某
某

忍ひとも行萍の梅まちわさと

ちるは散りぬともはえなり

ちりはなる梅の山の春ことに

深き香はつゝみかねたる梅の花

廿六日中宮
船霧

漕ゆく心の道をしるかのみ

まほのあとの霧ふかくなり

おきつ浪の霧ふきはらふかせをまちて

ゑ霧はれね山の端もなし

月前梅

庵にも月さし入てあるゝ宿の陰に

まてしかとふ影の梅の香

うれしくも袖にうつりて月の夜に

やよひこし桜の葉かと

葉桜

桜こそちりかれてきくね

たれ人のやともまねてなり

一もとの桜さく宿とよひしより

その名もかね一抱の花の名

夕桜

よしのやま桜狩して夕月夜

桜かり生はなるゝや

桜には夕ぐれなる夕くれの

風さそふ夕ぐれまきさ

夕雲もありやかな残る咲白ふ

梅の花やしの桜の後おひは

山家夕雨

まつしみ山家も雨の夜まなき

さみしさの人のなふかわきさね

霧中擣衣

衣擣つ声うつ夜さま来さえて

たか里のまくまつ夜くね

さと深み夕への雲ならてこそ

このまにもれ行秋のかけつき
むらくもにつゝまれて行秋の
夢ともわかず寝覚る哉
俺かまき給ひのかわしら
むらくもにかくれ行月かね
うちね家持
霧中笛
笛の音の野辺になりて霧の隙
夢の関ものかりなかりけり
秋霧は霧と重て桜かな
霧にむせふ笛のこゑ

平家月
霧ふかき秋のよすがらにまちかねて
月かけはくもの秋ちまきれて
雲消る山の端の霧のそらも
まつ秋のまちし月の影哉
秋雨
瀬々の流の水もなかの浦の
ふる雨にぬれてかゝる哉
秋雨
ゆうき家氏
いそぐ秋は袖に霧の

白ひこあてゝ雲のなかしひハ
終かをね清の人のこゝろばせくらし
こゝ花をおりゝる庭まてくれ

清水雲　赤の名庭

詠歌ハ雲を思ひて咲ふあふ
雲を待のおもしにして
雲取をたてまねおもひて
うとく名利となりなりしを
やそもる雲のおもろハ我おと
とありつるに何おもうて称

暮雲烏

空のしらひと往すゝ暮の色
まひてちらねと人をとふ行
暮ゆくの雲ハゆきしの色ぞるゝ
ゆきの人やせきハなれぬ
夜半ねとをきのこの夜庭の
彫よこゑも人のこゑよる
おきまのもひろ花を　藤の花
しらつきハ人のこひそる

花鶯

こ菜のよらしつゝねゝらひさや
谷の流しなかにうかうらん
谷のうちまてこあって人しなき
こゝらとゝふ宿の伴く
寄居千生
なれ住ん我かけにゆくすゑと
引ゝ萩のつゆ契の末
桜花雲とこ和ゝぬらん
落しこそ松まゆくらん
遅日 古来月まて香行京樹寿 辛未祭 京序 西風 浅とこ

見をるところまれ
老となりても老のぬるねの
なつかしさのこゝろゆかひる
あはれにまつのかはりぬる
ときの日影のなかゝてつらして
春雨 未花 こゝ評
ますらをのうつわ浅江の
つのくにわ芦の名をとふえぬ
平生月
露おくきくさのかゝひかるおきいる
月まや色のうかこゝろ色

けふ来

忠秀手続　一ノ仔

おもひ草斗なる忠ひてく

いつのよのことにせら舞

帰をもあらてなるを舞と　しのひもやらて　おもひこそ

常庭なきい

静なる心をしめてなくの

なをも月夜ふりてこそ

市中にまちひろくて　なきの

しきなかくて　我庵にの

浦妙まて

みとりそふこゝろ深き人こそやの
ふかゝらのしほにまかり

河邊納涼 〃

さゝ波のよる岸根のしるへ川辺に
まつほそき虫のこゑかな

梅雨夜月 〃

ほのかなる月の影なくて
うちしめる夜半そ更しつゝ雨
夜の雲間月のまよひしはるゝ
風に蓮の露のかゝる

雲梅 〃

こゝろさし露のかれぬ梅を
雲の〇〇〇〇しらてみん

庭萩　一之浄

風ならぬ庭の萩にも露ちりて
こゝろに秋を先しらるゝ哉

初秋扇　〃

~~[illegible]~~

なれしつる扇のつまにも秋ちかし
月扇にしる秋と来ぬる

初尾花

一葉ちる桐の梢のさはかして
まねきそめたるしのまくらなる

萩露　〃

いつまでも小萩にねる秋の色
うつりねる露にはこほれず

松間月

山寺の松を隔てゝ庭までに
さしくる月の影哉
霜とのみ見えてこそ庭まつの
こすゑを隔る月の影哉
水上の出くる月を庭まての
しらぬまにうつろふ浪のうへに集

霜ふかみとけず梢に座をしめて
月まくらき冬の夜をやる

某来
紀翁

冬山

うめ子
亀女

箱根山出湯の里に打つ波に
あかでみる雪つもるかな

春の雪にもあはで淡雪
やまにも冬かけて冬の山

夕納涼

赤城

夕風に涼しさまさる芦辺かな

里のしきねに月やどる
それゆゑ池のうき草風にふれて
夏の山路を越ゆる旅人
山川はやまもとの水ゆかしき
池のふかきをたのしむ
冬の日の長き船にてゆく江
舟まちもよそのなかめ

忍情

水京
亀玖

うちつけに恋のゆくへを
わがおもひ知られぬ身のつれなさ

おや子と見るのおもひつつ
なくなく娘とともに帰るかな

竹雲

様のつゆ絶らぬ岸と鼻升の
ゆきにふるる実の月の
雪おそろし升のねをたちて松蒼
これの毛衣を移しきみ

以下
22 丁
白紙

恋の歌よみ侍りける中に

我袖にやとれはやとる秋の月て
身を捨てゝ何か思ふ寿
その心より程は物はいかにして
よそにてはいはぬは人の袖くらへ

閨恋

さりともと荘も掛に祈のしるしは
ともね月日を何つゝまん

寄枕恋

夜な／＼の枕にしめし香をもての

落やとての名をしはさくらん
春の色の梅のつまよりにほはは
わかまては袖のうつりか来けり

寄月恋

我袖の手なみた影はさしなから
つきはしく人やとふたに来るらん

冬恋

落ちるね名をはたえぬらんとこと
岩ねね木の葉なりしよ
清けまれかさしせし井河の

契やつきは名まへなりけり

待恋

今宵まていろうつりて来ぬらん
まてとは若は掛ておけれとも

同恋　来名経

なかるる汁にかきやれる墨下の
きえつきかきさ人のこころかり

思恋　日

なかるる川せもとくみ来まかり
ころ松しるらん人めつつ

什石　これは何の諸本にもなし こゝにあけて露はやさし

いつも猶大事の人をおもふこと

こゝろなく花も生れなん

西来意

青柳の糸に木はわれねは降雪の

わけ入るもなきわか身生れり

ともとまんのこゝろもの雨あるも

わかれても語る様にとさらさら

夜不寐

錦の衣もきて湯は銭湯は　今宵もこゝに原う

年くふ時を忘るゝ

酒玉神社奉額和歌兼題
同　信州埴科郡南條村

ことのはもおもしろき雨や為をと

霧ふかきのなる露なつかしるらん秋の案

神代よりいまもにごらぬ江の水は

雨やとふ恋は能ういろまし

家にまさをまつ計　雨はるゝ

思ひしをねるとのもえあがる

乃[illegible]年

寄稿[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

文[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

明治六年

寄桜祝賀

萬人はみなちとせやかけて桜花
千年の春を咲匂ふかな

寄雀懐旧

わすれぬ机のもとの雀聞ば
こゝろにかゝる人ぞ恋しき
机並べ学のまどにすみし雀の
相見し人やいづこ行きけん

蒲菊の開くの
秋されは庭の春月を

七夕と千引の糸にたくへても
我とる涙に月を見るかな

旅路秋

唐衣千里をゆきて旅の
袖さへしほれつゝ露そなる

此歌は去来石井行公三年三年法会了遂
三月廿八日 讀歌

春雨のふる日昔を袖のうへり
こゝ風もなきのみならて集るめり
ありし世をしのふ涙のたえまなき
つゐ昔なくならぬ集るめり

わか衣なと露けさやあはれにも
さらに涙をまとふなりき

秋露

玉露を袖にうつして花の
ねさめは友を思ふなるかな
草の葉におく白露をよそに見て
見る秋に秋わかれゆく袖
蓬生の露は風のさそひて
あはれにも今宵はけさのきえぬれ
草の葉にやどる白露を

詠草

梅かゝの思ふ今日哉

森川千代子の身まかりける

に

若菜つむ頃もなくてちりける花

いもせの伴のたらちねをしへを

同一首　寄雪祝　よみ人しらず　六十一翁

千とせふるきみか齢をかそへつゝ

こゝろしは雪の白さをおもひて

ちとせふるもとの色をかへぬ

千年をかそへてさかゆらん

文政十二年六月廿五日　夜懐旧　清水弘胤一周忌　松本屋主

よろつ世の光にかゝやく

なき人の新玉のとしのたね

なき人は新たまの年のかね夜竹の

たらちねの露はあはれ集よ

こゝに宿し夜の露とこそすゝ

袖にこそ思ふあはれ

とし月ゆし人はなきをも子故

こゝろしもおもひ出す子帰

文政十二年　夜露晴月　江戸本郷　文字

こゝろも月影の人の月かな

いさゝかきこえしこゝろの雲
山の端にかゝる月をしたひつゝ
こしよの夜やいつまで行き
某之屋家　日母の六之年忌
梅の香とおもへ世にて来りしと
家は都なる御薗生の庭
寒中　十二月十二日大寒　五前
埋れ行小石の水に氷さえて
寒の戌（初）中風さむく成り
来るといふ春を待まの寒の中

行きゝてつねにこえなり
寄雪懐旧
降つもる雪ふみてこし山里の
ありしの冬やいつまで行き
あま雪のふりしありし世をたねとて
あやしく袖のやつれける哉
二年賀
嬉しくも年を迎へりせ徳さへ益す
ありひて一人千世をへつるらん
明治廿五年九月十二日七十五
才なりし父が六十年余の歳

秋懐舊といふ事を

年ふれと昔の秋の袖の露
きえにしあとて思ひ知る哉
こゝの思ひちよと思し年ふれと昔の
なる秋はいやまさりける哉
いつまてかありし昔をこの頃は
露のみ袖をおほへる一夜哉
ちる花もあかすに惜しと思ふ身は
なかなかに秋は悲しき
此月はいかにや見えてたつねまし
その花は縁をしのふもの思ふなる

友懐舊

去年まてはうちかたらひしはらからは
なき人数に思ふともなし
はかなくも過しし事をわすれぬ哉
昔の人と成なりしを

旅雲

浜岸にかゝれるかたの雲を
舟つなくまて生たる哉
我か心の雲のさかねの名こそ行

いろところをかへて無事なり

夏雲の立つ峰のあとや仲なれて

風にさゝれてさびしくなり

拾ふて寒　風土の出雲

まひねの露の玉や拾ふ人

六二ツ年　実成子この家をさす

[illegible]

おもしろく家つゝけてさらに文

千年ふる仲子となやちよ

以後　六二年

ニツ目　寺家　松の面影

あし竹の竹生えて寺の家の

以上千年の事何きつ世

山寺ともし能く[illegible]や

古ふてね[illegible]

三方庭の寺宿[illegible]

千年[illegible]や[illegible]

心　家の名残

一筋ただ[illegible]

[illegible]

一節すゝひためにこそ心のあきの
おしらへあり千条

琴　　赤こう名将

清風のしらへの下枝すかよふらん
たへくさえる雪の滝の音さと

年々
庭上雲　十二年六月十二日於深川邸小宴探題

庭雲のおもへる琴の音を
千年の友と見るや千歳
北山の宮よりみれは庭雲つゝ
おもへの随に守さる流兒

よつの人の心も雲ゐは
我庭雲の頭さみゆる
遠山清みゆく流る流るそて
春まてみえる庭の雲
庭雲のおもねの月風なかえて
心の露はあからめやその秋

水

そこ涼ちゝる底を心にて
さて宇の木かけてそへの秋
岩にそそくか心の音澄

にこえむ御代は代々限なし

六十賀　寄菊祝　大江玉五〇〇〇別上村　大字深川〇〇〇山口茂樹

千年の坂さへ越えてのぼるべき
君の六十路はいまだ半なり

千年かけて咲白菊のこれよりぞ
六十路の花ともつゞ盛にて

鶯　口

鶯の鳴くにつゞる声中に
ときはねやまじりゐる哉
鶯の初ねの数に寿をそへて
幾春も千代にかはらぬ声きかん

水　一周年忌　〇江玉〇といひし人

なき魂をとむらふ哉手向の
その水はこゝろありちかひれと

六十一賀　寄菊祝　武蔵国三宅郡本與村　藤井勇求

千年のさのいきむ君がかしこさ
齢このよの人の菊やうらなん
いく千種花つきしとこのまゝに
よろこびの人の出来の春
菊の影こゝの〇〇り　〇〇〇〇

仁人の節のなさけさくこそあり

君か松も千歳につらねわ

手折つる君は御室の花の色

しらぬ人積に朝に花の絶え

木村ほりの九年二第まてよま
こりしらかの事こそ人なりつ

ありてよめる

たのまれて千年とはなかりけりと長生て

思ひきやまてといのりおきを

あり京尽俸
積

紫の名かくるは陰の色に香れる

あり花の積の落この舷

以下
6　丁
白紙

雑

萩

三條知簡の六十一の君の賀 八月十五夜

ちとせを今宵は君にいはん
かぞへこしつゝちとせを
末にみん君をかぞふる秋は
ちとせや今夜の月をて今の中
うつりはえねかひもえぞ見ゆ
まくらすみるこそ見るかの

寒鶴

ねぐらやたれにもおく霜夜の
声つくる夜半の声

七十賀

君が代のよはひまさるらん
また千とせのかすにそへ

八十賀

松が枝の千代のかさねの
鶴とともにちとせをかさね

河原左大臣の文の中に四十よ
八月夜月

夜なかの月見てはうたふ
ながめし月の影の色
夜もなき心ありて

一なかきみの法然ゑのくの月
こころの勝をまつ子四月かな
蜂ぬ衣りこそかゝり分
右ハ子の猶未待た衣の
ゐさまりなる梅
今いくて秋ゐる、計をてかへて
おりし来てふきみのふとる年
竹もい　妹至忌切
久子なり
露深き霧の蜂をとこそも折
なからへゑ消ゆさへ分も年
とはなくと思へハ衣八千竹の

もとのゝも今ハ露かゝらく
露しけき、蜂ぬも宿と分けは
青はこのそて袖そぬれしけり
十六年十月十三日小京亜子
のさかりなりけり
梅ひさや小京ぬ露をさし蜂は
一袖まのとえ思ひてしくく
はなかくも秋と共てなちらし
なおおしみのえたとるる年
於東の平棠子
華菜連年
梅

千とせふる松にかはらぬ宿にこそ
ゆかりまつらん
きみかよはたくひもあらし せかれぬ
ちりはてぬ花をいつかはいろそへん
咲梅の枝のしけるなりけん

同　小七
承応二年十六歳

おもひねぬ人の心を松のはに
ふかきおもひは[illegible]

冬

雪の松ふる雪ふみて年の暮
たえぬまは[illegible]

あらたまの春をも千代にかさね
あはれ何のふかき人の宿
人しれぬおもひの宿に
娘か家子にこそ
いかにせむ人のはにみておもひ知る
なかなかに人の松にて
これも[illegible]
たちまちに[illegible]田辺り
[illegible]の花
[illegible]の松
寄松懐旧　[illegible]

おもしろき宿にて初て梅の香
とふらひとおもひし香よ自ら
たちしひさしきかたの中なきに梅の
こゝろからねむりて匂ふ梅の花

冬懐旧　服阪おもと願し十年を経て
冬ねむるとて故ふるきこそ冬のよは
掩ふ霜おく月の夜を
峰も雪見し昔を偲ふ蓮さらて
冬ごもる冬を冬ねかねと
三年ぶりに母の故郷のあはれさ

春ねさむや今日のかすみ
寄雨懐旧
いにしへを思ふ寝覚のさみだれに
ふるきおもかげなき宿にかかり
やがて来し人の昔思ふさみだれ
ふるきかのの洞来之架
落花ちる頃は春の昔思ふ来
春雨人にもろくやさしくや

寄竹祝
霜雪ふたたびねたのくれ竹は

君の千年のしるしなりて
ことしより七つの花の
よはひをみる君がためしかな

蛙

夕顔一節さへりてなくかはづ
あはれ深く人やきかまし
筆とりし民の家の蛙
声もなくこゑもすまさむ
川名のうへ子の雨三人に
来てきくこそ月の夜に　栄

かくれて　三日月やかし
このあさくさして契りに三日月を
なかさらにはるかすてに人を

暮　　服好菊丞

このあさなたかしにたこよいまいさを
このあきさらにあはれに行わけり
あききいはり木のさとに傍なきて
かきかの宿によるすかしら浪

寄月憶旧

月影はそのまゝにかへるとなきゝれて

分ねもて忠を表しこの外
月にみてあのふるきぬ久へこの外
去りの人を月にそへしを
てるふさけきとりの夜ハ秋宵の
ちかきるのくまる月の新樹
かくまゆんと行んと思ふをのこの
離緒哀ハ月なるや

くるゝ後てうすわりとこそおね
き稲よめり寒る人のけ恨の
こゝろよみてをいひをる

英州のうれきふしをさうたゆく

このたひおもひたちし事なり
やくりましく稲子のさふにふかりて
千代かとちきるちしわ事なん

ほなとしおきゝありなりとの
ものおもひなとしおわり

州の名をしるてあひしふらくは
くれきつもあきらこゝのみわ

陸奥の玉の大川とふるさとの人
のかゝり之所といふ事松の
しらてふよき陸奥のお松
ふよとそていひをる

陸しくハ母まる行きをちのくは
松の言ハ陸奥の名まれ

よこ之町より三丁ほど隔て
まて鹿の子絞りをいふなり
かくいひなせり

書経に恵の子こそ鹿の子の
しるしにもあるべきよからん
なれその字はいふなり鹿の子の
いはれもつの名は世に広まり
書絵にもことに縫ひ括で絞りの
鹿の子しるしと云ふ人もあれど
あるひとのいはく鹿の子とも云ふは
たつこいひなんといひけるよ
絞の染様字より始れる時の

こちへ来る子なまめや来らん
家まさに結びる乙女のにほふ
こと知るべきなり
西鶴によりて父の始めと
ら染手はきよくなれり
大の字にものひけ猫とおもふらし
人の子をきく何かあらず
鹿の子染のこと
おもひいでて
つまりて手まきてつれるこの来て
うきてわかれるかり
さくらはならんそれ紋所て

こゝろ安きと何思ふて春
歳暮をくるとかゝれハ
うれしさは年くれゆくもなし
八朔の空めくらしのおもひこれ
うれしさは心のまゝのかはりけり
世の中の苦楽のみもとめやるにも
なからへきこのよの松ののこる
十六日未十一月十八日
師文培の十三回忌に
余の墓や涙そゝける露をたむけ
三比寿帳のをしへしこる秋

今もなほわすれかたき友垣の
そのかみをおもひ出ては
いまもなつかしく秋来たれ
我身のうへの幸のいまち

又

なほ世にある一角ありてまことの
まろき心といふ人はなし
うかひしいふ事なきことは
うらみなく何をうれへん
ゆくすゑを尾とてゆくへ

らむともの光こそしるく

枝雀居人

わかのうらふかき思ひなき身も

うちわたす人の名にあかれ

敷島のみちふかくしたふ人の

心あるしこそなるとの秋

丹波篠山の桜の家と
人々こゝろうく

暮りゆく父のはかなき積もの枝

なかやかてし雪の世となり

嵐の秋のこらしき山を暮りわたりて

萬代をもみて藤の花しるく

あつまりしる家作り堅くて
十月頃といはゆるよき

よき友垣とよはれつゝ

ながれより千代青風を友として

かねさこの母のね宿とあるまし

我宿も空とほれしのこら人

書て風を友と母のをか

君継井
十七年十一月十九
深東君いはれ

かねかのさきね空の身を

おもふ人に恵みの日この秋

十七年十二月一日大樹公誕辰の時
よみて奉りける

あまりしは千代のはしめと契るらん
ときはなる松の緑もかはらして
萬代を経ん松の緑もはえます
よろつよとあふく[illegible]の[illegible]
又あるはしく家[illegible]
よろつ代の[illegible]ことも絶えせて
ちよをてらさん宿の[illegible]

寄天象祝　福田利邦　七十賀

松本世の星[illegible]

天の下千年の影はえける
かけうつる松は[illegible]星と流れし
千代経る[illegible]天[illegible]

寄雲慶賀　[illegible]

[illegible]のさと紫の袖[illegible]
[illegible]なき[illegible]
峯[illegible]松[illegible]の
[illegible]の[illegible]

十八年一月吉　山陰の[illegible]　七十御賀

寄竹祝

いはふ千代をこめてなかるゝ池の
さゝれいをこえつゝ鶴のあそふらむ
しらるゝ園の竹むらすゝみ
君か八千代のかすハこえけり

海辺鶴　佐々木尚忠

浦まてほしる網の絶えまなく
芦間鶴とこゝろ雨露を帰るなる
渚の海原さしてゆくらの
千代もなれや鶴ハこゑなり

河辺竹

水清き河の小河に影見えて
千代をかそふる東風の声

寄鶴祝　広橋藤原ふさゝ　宰一賀

千代ふき君か鶴ハ葉かくれて
今そえしくも末のあかまし
世の人にゆつりそふへき藤なみの
たのしき鶴ハ君をのむらん

鶴契千年　かくしく

木にそ囲みて君と契るか
千年の後のなかの鶴と

わしろの歌を君かよましほて
こゝろは世に千代をつゝまし

寄亭祝

御らんす千代をかさぬるおもの子の
なかきいのちにこもらは生まつ
こゝろとそかはらん千代つゝき
君の歌をもちかきたのむ
十八年十一月 詠し 寄年よりこしらはな
やまかはしらてつるのひ鶴
の病しきみせをねく

こゝろをきくはまよひとこふるゝ なき
なきいろの鶴をよろこひをかる
えたをわかちさなか鶴らね
うひ鶴のなきいろと長生まつ くる
まつ山のまくらにうつゝ人まことそて
ちれなからよちとれうひ鶴

松迎歌友 江利重郎

時鳥歌をのそむおもひしる
雲林君の千代の友かけ
雲かゝる尾上の雲を友として

宮こゝ霧に見えつゝのおもかけ

名所松　作〻小弘綱　長行

昔おもひしのふる住吉保けの公達の

杖とりやすらふ松の影本

潮風も千代の声ある浦ちかき

わか浦の浦松のまつとも

海芝

花紅葉色なるにも見えて

海辺より見の生ふる芝草

遠さ客も船はかゝる春日野の

色はこそ見えぬ空の芝草

春之のこもかりそめに

千代なき松の春の芝の

家にこそさかえおほかさねや

松本つ給と小ありの　ちよのいろ

春のちきりを松よりよりの

しほるゝ春に哀れさる

四月頃　寄竹祝　大樹御玉　新緑之言

栄えし千代ゝのあとはしけり家の

春のねに高くかをる

若やかに生ふへき宿にこもる年
神のめくみをうけしわかき身そ

賀

はれわたる世のしるしみえて末の世を
祝ふとかる天や今そ厳し
この御山を
いくとせを千代へてかはらぬまつのみとりに
千代をいはひそめしこの山を
あふきみるまつの星のかけもなを
神そしる千代のまつの計

十九年
九月六日　川千代子の
ふりかへる銀杏のちりくる
ことのはを

やまさとの紅葉をもとめて
ことしは秋の袖はいかにかな
木のまにて紅葉のいろにそめてん
紅葉にもあらしの風のふきて
霜露の紅葉のいろはいつのまに
こゝろに千代の秋をしのひて
君のこゝろをしる

こゝろありけれはとこそ祈られて
あやなく袖のやつれぬる哉

霜後菊

霜やおくらむかはる色もなく
さらぬたにうつろふ菊のにほひ哉

藤原行平
霜の夜の紅葉にはらふ
さらぬ袖さへ色に

あはれなるを見る人ありて
なかき世の秋の菊の色を
さらぬにもなかき世にありて
秋の菊を見る袖の露

梅　中宮亮康定二十六年家

こぬ人は梅咲宿のにほひをも
袖にかへても思ひしるかな

さくらの
こゝろし

志わすれぬ心はかはらぬゆかり
ともいはなたに生きて侍本

月前哀傷　前右近衛中将細川利蔵朝臣家

偲ふの露やむすふや朝露
かはる月もありてなかれ
一夜まてもふりけむ月のなかめて

なくさめつ旅の衣を

此日

我袖ハあかぬ露に染の紅葉

おもへや唐の錦しきけん

岩清永利か庵の木を

ころし植るとて家と

ふさり

今年より蒔し又のかくの小松

志ほのちとせ末まさるらん

こゝろしてのち千代も植えし又の加久の木

さる頃宿縁下生しもの

ころし植えし又の木今年より

いさゝかのこそて生しける覚

六月廿日出雲の旅来

示し旅の別さり

旅衣のしらず袖の宿り

しら雲もしる寒くゆく覚

宵は海越月をとゝちひて

浦とゝて行る旅様覚

おもはる浅宿きにとゝて方

袖とゝぬ寒きまくらん

廿一年　九十賀

いく千代とつもりて年ふる松が枝に

君の齢のかぎりしらねば

正しきもはるかの末君がため

千ぢ萬代といはひそめけり

冬暮　水戸庄澤

いく本て積もる雪山の

竹の梢に冬のきぬらん

古へぬるもつもる年なみ

心の中に年をくれつゝ

九屋

冬旅燈

眠りさそふ夜の筆をとりまの

袂かはし千尋やしるし

冬旅燈

霜枯しも枯ゆく枝と衣とや

月はさゆる雲のうれ哉

大蔵卿の

ふところ子かな

杉をそこもうち消し冬霜の

その中へを分けゆきもとの

おもしろや雪の霜とけ枝は

一袖ハかゝる老之しらぬ（?）
　たえし（?）ぬるときにかのまさて
に伴（?）婦の安らかき人ハ老ても
　かきのかくきハ物とおもひそれ
稽（?）懐旧
月影ハ昔になりてかはらねと
　こしかた人のわすれかたの秋
おく露の消し人の思ふなるも
　こゝのつゝるはかなきこの秋
去年消し世の露とおもふ身

一袖ハかゝる老の今日の秋
寛（?）元一年十月
糸光大師絵傳之嘔し給ひける時にて（?）
ふりてゆるふりてハ跡をまとふねハ
まよひてハみちの安れハ来らり
なさけての安らかにかきれなり
このよの光りのふくみにら給ハ　給
このわきかわきハけしへの
このよをたくにのつくゝ来なり
千歳かるをみの初之物語
このけしつゝまくる月哉（?）

旅人

宿の夜嵐に旅つゝも

しらけ月をしれわびし

夜寒　細川　之昆

行く人しなき夜嵐の音の

音にさへ夜寒なりしの秋

草葉にむすぶ露の身の

上衣の寒さは笠思ふ身に

六十二年

旅を夜と通ふ人ぞ

時折ふく旅人のこゝろ

夕ぐれ見ゆる

秋ならぬ心細きは夜

ひとつの影をならべたる

旅人の寒さはいと身にしみて

寒しに衣かる住かな

忘れし身をそのこゝろ

千年園

寒さ千筆の風を送る

とりわき秋の寒さ

六十年　酒二月　汁縄社　之昆

紫井の水をさえと汲おくよ
これやこの筆手なる筆
よきいをと何ふにも汲の江
硯といふものなき筆もがな

寄述懐

ありちも筆は ゆふかいこえこちりやると
おもてそ筆は人をそつしき

筆

何事かも書おもと知らへき
筆そふかのおもとなそりせい

墨

夕つの露ものこゑる向をひま
名まで墨の言葉うける

硯

一すじも知りねおもとよるてるほにて
硯のこころなして深きなつうこころき

寄玉言志

様言葉は一角なるて石の玉の
よろずに心といはれゆしうに

おろし見 悠田

こかれ行しものなの色とみす
たへてこそ思ひ将されれ
旬
玉ほこの[illegible]かしらぬれ
峰の[illegible]まとへなれわる東
川口の関子の父の翠まり
(家)太之る也
あはれともかくてありはしとおもふ[illegible]
なき人とこの[illegible]しらつて
右之歌九月十四日板倉侍従様元一年[illegible]上関
梅雲庵之近作ニ示[illegible]

秋露
稲葉露と袖にのこさし言の葉下の
おりしの友を思ふ今日の秋
草の葉におく白露をとこそおく
言の葉下におもひやる[illegible]
草の葉にのこれおくる白露を
袖にのこさし思ふこころの秋
九月廿日まつり 梅も
風秀露 三友三
草葉の露つつ風のふかれて
あはれいつまでしは[illegible]への秋

同忘夢　十月廿一　小出

身にせまるうきことさへと改まとよ

こゝの席にも集まる人の

昨日まで相はかりし酒の友は

いのちを終る…生まれ

藤原咲子の肥後の息子身
まうしゆうし

こればかりとこそ終りぬれと身の

なくさむるは琴を弾く門出を

まれ／＼人の
とふなる

なつかしく思ふ身はあらなくと

宮のおとゝのまうで来

雲居はよしとる……

つきせぬ人の風のやうに

明治十二年十二月廿七日大槻子
子のみ……

こればかりはさへ集まりせん

いふかひなき世のまよひの任を

おもひきや霜にまかせて……

いまもその……

寄神祝　　故備前…村
中村千ちの常…

千歳の…しとまた也

神の宮の事をあかしひて
萬代とつかへむ神のみことは
なかきよをとこえつゝよろこひこそすれ
故之源氏のいつねせむところまたは
原之詳及命と名残りて
老翁と申し奉りて以後の
齢は千とせをかれさりける
久方の月のごとき母と聞えて
千歳経るに及ばずしてかく
うつし絵を拝み奉りて
一しほ年ねて拝みまつかね

千年の宮居をさして以後の
齢を世に伝へ来ることなれ
千代に宮居を拝みなれと
物まを年々名の世ゆへに
なれ又千々の春そこなひて
おもしろくことよ見えさる
徳のある弘徳のおもむき家
つくりして家をたてよ
詠みて
此歌の家をかへて
ふみまとふ事を代々さす宿は
千歳をみえて後代にのこる

風前落花

み芳野はさくらのはなの峯桜

ちらすな風にちらさすもかな

池氷水

水のおもにちらしし氷もとけそめて

わすれてもかりねのまとはなをさゝ

右正一位三條公の當日

詠

風さそふ花にちりけり袖ぬれて

ちるとみるまに香をとゝめけれ

水枝さへ本末をこそしたふしのはし

こゑしものゆくらそくらい

寄世祝

君かよゝ千とせのはやしにとも

けふも見る花の色さへ

咲にほふ花とおもえはさかへ

君か千年のかさし哉

寄雲祝

咲にほふ枝のさかへをたのみ

よろつよたえぬ宿の雲

松風の園のさかへと

よろこひをのふるなり

いひしらぬ心の岩手のたちまさり
くれたつるやの井をわすれん

寛永六百五十年祭
寄月懐舊

昔かたりをきゝて袖の涙
いにしへ思ふ月のころ覚

弘覚寄月

秋風の月をこそ偲ふ袖のぬれ
青山の上に千年の祭

旧会藩戦死二十三年
追悼祭に

たましひのかよひけむとなりさしも
消えし人のなのみそのこりける
うらみけむ夜のいさよひおもひつ川
去りにしの世をわすれぬる年
ますらをのいさをけ夜のいろこひの
いまもしきみをまちわひぬる

秋夜書 千年祭

唐崎千本松不たゝす
神さひたまの夜なりけり

文政十年
十一月 中村桜之

和歌荷葉

ゑ敷つゝは袖のしをれを見せて
あふもと宿にかゝるうこれ
涼しさは雲間に出る露ので
ゆふ袖にも露かゝるもの哉
秋露は雲間に隠てあさけくし
なかの声の露かゝるもの哉
名をまもる袖のうへに置るゝて
こゝろを秋は山の紅葉あり
あき宿も名をしるは月は宿と

わかれ出でゝわかれ袖ふる哉
露は霜結ひぬるつゆのをり
なかの月をかて露も紅葉
わかれ路を
人なるらん
ちるを見る紅葉をそて見ての哉
まつ秋にて人の声を

書

ねるも紅葉つもるはわれおもふ
試みしるしもねの声を世

宰加
寫本
堀 ... 書林 ...

さとしより千年をへてちとせやま
たつ年に雛りや亀のおもしろき　斎

大槻文庫